

Title	汲古閣本十七史について
Sub Title	
Author	山城, 喜憲(Yamashiro, Yoshiharu)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1982
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.19 (1982.) ,p.259- 295
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	阿部隆一名誉教授追悼記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000019-0259

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

汲古閣本十七史について

山城喜憲

はじめに

正史の刊行は北宋淳化五（九九四）年の三史校刊に始まる。宋朝南渡の後紹興年間には、亡失した北宋刊十七史の修復重刊が企られ全史の再整備がなされた。元代には大徳九路本十七史が、明に入っては南北両国子監二十一史が知られている。しかしながら、国家の権力と資力とをもってしても歴代の正史が、ある企図の下に新たに合刻印行された例は明北監本を除いてはかつてないことであつた。明南監二十一史にしても従来の版板を加修増補した宋元官刊本の修本とみなされる（尾崎康 南北国子監二十一史について 本論集十八輯 一九八二年）。しかるに明末葉に及び、市井の一人私である毛晉の嘗む汲古閣が十七史の校訂刊刻を見事に果し得たことは、正史出版史上注目し値する画期的壮挙と認むべきであらう。

本稿はこの汲古閣刊十七史について、刊行に及ぶ経緯を辿り、伝存諸本の書誌調査に基き印行補修の経過を鮮明にし、合

わせて汲古閣刊十七史の系統を引く正史諸版、いわゆる汲古閣本正史の伝系を明瞭ならしむることを目的とするものであるが、本論に入るに先だち、汲古閣及び毛晉の事績を略述してきた。

毛晉は原名を鳳苞、字を子九といい、後に名を晉、字を子晉と更め潜在と号した。弱冠前は字を東美、晩年には隱湖とも号し、また汲古閣主人、篤素居士、閔世道人等と称した。蘇州府常熟県の人である。明の万曆二七（一五九九）年正月五日に生れ、清の順治一六（一六五九）年七月二十七日に歿している。享年六十有一。まさに大明王朝の衰亡、明清王朝交替の乱世を目の当りに生きた。彼の略伝は陳瑚「為毛潛在隱居乞言小伝」（確庵文藁）、錢謙益「隱湖毛君墓誌銘」（牧齋有學集卷三二）、鄭德懋「汲古閣主人小伝」（汲古閣校刻書目）等に散見するが、近人錢大成「毛子晉年譜稿」（國立中央圖書館館刊第一卷第四号 一九四七年、影印本 香港龍門書店 一九六六年）が上記三伝はもとより、未刊の毛褒撰「先府君行実」、或は家伝の家

譜等我国では見られない諸資料に基いており最も詳細である。以下主として錢氏年譜稿に抛り毛晉の生平を述べておく。

晉の父は諱を清、字は虚吾、一に叔連ともいい、邑中の篤農家で郷老耆碩として農事の指導に当り徳望も篤かった。一方、広く名人碩儒を招き自らも経義に諳暁したと伝えられ、相応の学識を有する人物であつたらしい(牧齋初学集卷六一 毛君墓誌銘)。母は戈氏、勤儉純孝、夫清の生業を善く助け、晉の遊学を支え彼の功業世に賞されるに至つたのはこの戈氏に負うところが大きかった(同卷三九 毛母戈孺人六十序)。晉は父三十二、母三十三の時の子である。万曆四一(一六一三)年、十五歳、蘇州の童子試に応じ、業を府学博士員高伯璋に受ける。この頃、離騒を好み、陶淵明の為人を慕い、母戈氏の助成を得て屈・陶二集を刻す。万曆四五(一六一七)年、十九歳、舅父(注1)魏冲の門に入る。同門に馮班(字は定遠、常熟の人、明万曆三〇(一六〇二)年生、清康熙一〇(一六七二)年歿)があり以来交友を契る。翌四六(一六一八)年、二十歳、父の勧めに従い錢謙益(字は受之、牧齋、懷慶等と号す、常熟の人、明万曆一〇(一五八二)年生、清康熙三(一六六四)年歿)の門に遊ぶ。謙益とは終生交誼を絶やさなかつた。謙益は度重なる失意と挫折を経て晩年に及び、自らの悲涼を秘めながらも「余少有四方之志、老而無成。海内知交彫、謝道尽。及門之士、晨星相望、亦有棄我如遺跡者。唯毛子晉、契濶相存、不以老髮舍我、而子晉年已六十矣。憶子晉擢衣升堂、年方英妙、今已巋然為鄉老」(有学集卷二三 毛子晉六十寿序句讀點は筆者)と昔日少壯の頃を想いつつ毛晉の老成を称えている。翌四七(一六一九)年、二十一歳、一〇月二十九日、妻范氏卒す。天啓四(一六二四)

年、二十六歳、博士弟子員に補せらる。六月一〇日、父清卒す、五十七歳。同五(一六二五)年、二十七歳、七月、魏忠賢の恐怖政治により東林党の烈士楊漣(字は天胤、大洪と号す、応山の)等が獄死。漣は万曆三六(一六〇八)年より四年間常熟令に任じ、父清との交誼が厚かつた。晉は為に「忠烈実録」を撰す。同七(一六二七)年、二十九歳、初めて郷試に応ずるも及ばず。以後しばしば応試するがいずれも不第。(注3)崇禎元(一六二八)年、三十歳、この年より、十三経、十七史の校刊始まる。「晉書」「周礼」を開雕、以後毎歳一経一史を上梓。五月一三日、継配康氏卒す。同二(一六二九)年、三十一歳、この年継室嚴氏を迎える。一月二七日、母戈氏卒す。六十三歳。同六(一六三三)年、三十五歳、春、李穀、「隱湖題跋」を撰す。序に「子晉、自甲子(天啓四年)以来、校刻経史子集及唐宋元名人詩詞、凡二百余种、每刻必求宋元善本而折衷焉」と。同一一(一六三八)年、四十歳、四子表生まれる。同一二(一六三九)年、四十一歳、「毛詩草木鳥獸虫魚疏」を撰し上梓。同二三(一六四〇)年、四十二歳、この年、十三経の刊行を遂ぐ。六月二六日、五子屢生まれる。同四(一六四一)年、四十三歳、常熟地方に水災発生。刻書の為の資金渴き、負郭田三百畝を売却して資に充てた。麗江土司木増、遣使し汲古閣刻するところの書を求む。同五(一六四二)年、四十四歳、秋、郷試に赴くも及ばず。前年に続いて水災あり。里人飢窮するもの多く、晉は蔵米を賑出して貧民を救済した。同六一(一六四三)年、四十五歳、冬、錢謙益の絳雲楼落成す。上梁の日、晉はその楼に登り謙益

の賦詩八首に次韻す。同一七（一六四四）年即清順治元年、四十六歳、二月、「三國志」開雕、十七史全史の刊刻を遂げる。三月一九日、流寇李自成北京に入り、明毅宗崇禎帝自縊す。晉はこの変を聞き「題崇禎曆一詩」を作る。順治二（一六四五）年、四十七歳、清兵常熱に至り殺戮慘酷を極むるも毛家は無事であった。同三（一六四六）年、友人錢謙貞卒す。為に「未学庵集外詩」を開雕。同五（一六四八）年、五十歳、この年より十七史の補修始まる。次子褒、三子袞、常熟県学に入る。同七（一六五〇）年、五十二歳、この年絳雲樓焼く。吳偉業（字は梅村と号す、太倉の人、明万曆三七〇～一六〇）來訪、齋中に吳寛手鈔宋謝翱「西台慟哭記」を読む。同九（一六五二）年、五十四歳、孫一飛（褒の子）生まれる。同一一（一六五四）年、五十六歳、四子表、五子屢、常熟県学に入る。同一三（一六五六）年、五十八歳、「三國志」の補修終り、十七史の全補修が完了、錢謙益に序を請う。この年、三子袞卒す。同一六（一六五九）年、六十一歳、六月病臥、七月二十七日卒す。同一八（一六六一）年一月、戈莊の祖塋に葬らる。錢謙益、墓誌銘を贈る。編著書に、毛詩陸疏広要二卷、毛詩名物考三〇卷、詩余凶譜補略、方輿勝覽録、汲古閣刊書細目、隱湖小識、虞鄉雜記三卷、救荒四說、永思録、宗譜先賢、香国二卷、和古人詩・和今人詩・和友人詩・野外詩各一卷、隱湖唱和詩三卷、隱湖題跋二卷統集一卷、海虞古文苑、海虞今文苑、明詞苑英華、明詩紀事、明四秀集、昔友詩存、等多数ある。

汲古閣は毛晉の蔵書楼で、江南蘇州府常熟縣昆承湖（一名隱

湖）湖畔の七星橋に在った。時代はやや降るが詩人・書家として知られた清の錢泳（字立群、台山或は梅溪と号す、江蘇金匱の人、清乾隆二四〇～一七五九）年生、道光二四（一八四四）年没）は汲古閣の行いを次の如くに伝えている。

汲古閣在湖南七星橋載德堂西、以延文士（中略）汲古閣後有樓九間、多蔵書板、楼下西廊及前後、俱為刻書匠所居。閣外有綠君亭、亭前後皆種竹、枝葉凌霄、入者宛如深山。又二如亭左右則植以花木、日与諸名士宴會其中、商榷古今、殆無虛日。又有所謂一滴菴者、為子晉焚修処（履園叢話卷二二）

毛晉は私財を投じて古典籍の蒐集に努め、汲古閣樓上には万卷の書籍が収蔵されていた。晉の友人で、二子褒、袞の師でもあった陳瑚（字は言夏、確庵と号す、太倉の人、明万曆四四〇～一六二二）年生、清康熙一四（一六七五）年没）は親しくその蔵書に接し、「予得時時登其閣而覽其書。其間秦碑、周鼓、國史、邑乘、山經、水志、梵夾、道書、唐宋詩歌、金元詞曲、或縹而囊、或韋而編、或版而束、或積而函。五車所未載、四庫所未収。其穹如壙、其齒如林、予為之目眩心移、而不能舍也」（確庵文稿 汲古閣制義序）、「毛氏汲古閣、登其閣者如入龍宮蛟肆、既怖急又踴躍焉。其制上下三楹、始子訖亥、分十二架、中藏四庫書及釈道兩藏、皆南北宋内府所遺、紙理縝滑、墨光騰刻、又有金元人本。多好事家所未見」（同 為毛潛在隱居乞言小伝）と精選架蔵された悉々たる秘冊に瞳目賞歎している。この汲古閣蔵書の全容は今知るべくもないが、後に散佚した秘冊の一部が季振宜を経て清宮昭仁殿に入ったことから「天祿琳琅書目」に拠って、或は「汲古閣珍蔵秘本書目」に拠ってその一半を伺い知ることが出来る。

この鉅万の秘笈を求めて四方の文士が汲古閣を訪う。毛晉は好んで賓客に接し酒食を饗し悦むことなくその蔵書を出して借閱に応じた。陳瑚はまた「子晉家隱湖之上。續学多聞、名滿海内。海内士大夫、以得交子晉為幸、争造其廬而請謁焉。子晉性好客、客至則剪韭烹葵、欣然命酌、出其蔵書數万、与客賞奇文析疑義、傲古人月泉吟社、玉山草堂之遺風。酒酣耳熱、分韻賦詩」（確庵文稿 隱湖唱和詩選序）と毛晉接客の一般を活写している。これら賓客の中には錢謙益、吳偉業といった当時高名の人士があつた。吳偉業は「扁舟訪奇書、夜月南湖宿、主人開東軒、磊落三万軸」で始まる「毛子晉齋中誦吳飽庵手鈔宋謝翱西台慟哭記」の五言詩一首を遺している。

毛晉は天下の珍本秘冊を遍く蒐集するに努める一方、架蔵の善本を基に主として古典籍の校訂編纂並に出版の事業に従事した。陳瑚の「為毛潛在隱居乞言小伝」に「蒸自其垂髫時、即好鈔書、有屈陶二集之刻」と見え、毛晉が成人する以前、恐らくは万曆末には既に初めての出版を行なっていたと思われる。以後毛晉没年の清順治一六（一六五九）年までのおよそ五十年余りの間に數百種にのぼる書籍を刊行している。その刻書の全貌は未だ精確には把握し得ないが、毛晉自編「汲古閣校刻書目」及び清鄭德懋編「同補遺」（共に顧湘校、小石山房叢書収）、潘景鄭輯補「汲古閣書跋」、陶湘編「明毛氏汲古閣刻書目錄」（陶氏編刊書目収）、原三七「汲古閣刻版考稿」（東方學報東京第六冊一九三六年）によつて大体をうかがい知ることが出来、經史子集四部全般、更には道蔵、詞曲をも含み極めて広範に及んでい

る。かくの如き浩繁かつ煩費なる出版の事業を行い得た背景には、明清鼎革という時代の社会的文化的要請があつてのことはあろうが、相応の畜財に加えて、校訂編纂に當る有識有能なる人財、更には相當数の鈔手、刻工、印匠、裝璜熟紙にたずさわる工匠の存在が想定され鈔手として周榮起・劉臣の名が知られてはいる。しかしながらその実態については「饌勸之廩、劓劓之工、裝潢熟紙之匠、各從其宜秩然有序」（曝書亭集卷七九、敵孺人墓誌銘）、「吾家当日有印書作、聚印匠二十人刷印經籍」（汲古閣書跋附編、毛跋「影宋精鈔本五經文字九經字樣」）、「家有劓劓良匠、朝落帚而夕上版矣」（確庵文稿、隱湖唱和詩選序）、「閣之下梓工數百人、翻宋刻十三經、十七史、以行世」（同、汲古閣制義序）といった零細かつ断片的な記載によつて一端を知り得るにすぎない。汲古閣の出版機構については社会經濟史的、或は文化史的にも興味をそそる問題ではあるが、當時の出版事業の常態についてすら未だ殆んど知られていないのが実状である。

十七史校刊並に第一次補修の経緯

十七史校刊並に補修の経緯は清順治一三（一六五六）年毛晉自撰の「重鶚十三經十七史縁起」（「十七史」首に掲載、以下「縁起」と略記）に述べられている。その冒頭に、

毛晉岬奔之臣、禱昧之質、何敢從事於經史二大部。今斯劓劓告成、或有獎我為功臣者、或有罪我為僭分者、因自述重鶚始末、蔵之家塾、示我子孫之能說我書者。天啓丁卯初入南闈、

設妄想祈一夢。少選夢登明遠樓中、蟠一龍口吐雙珠。各隱隱
籀文、唯頂光中一山字皎皎露出。仰見兩楹、分懸紅牌金書十
三經十七史六字。遂寤。三場復夢、夢無異。竊心異之。繳羽
之後、此夢時時往來胸中。是年余居城南市。除夕夢歸湖南載
德堂、柱頭亦懸十三經・十七史二牌、煥然一新、紅光出戶。
元旦拜母、備告三夢如一之奇。母听然曰、「夢神不過教子誦
經史耳。須亟還湖南旧廬、掩關謝客。雖窮通有命、庶不失
為醇儒。」遂筮曆選吉。忽憬然大悟曰、「太歲戊辰、崇禎改元
龍即辰也。珠頂露山即崇字也。奇驗至此。」遂誓願自今伊始、
每歲訂正經史各一部、壽之梨棗。

と、校刊に及んだ顛末を述懐している。ここに言う如く、天啓
七（一六二七）年（丁卯）郷試応募の際の奇夢と母戈氏の諷諭
とが直接の契機となったが、毛晉には従前より正經正史のテキ
ストに対して相応の識見があった。当時明末には、南北国子監
本を除くと十三經十七史の頼るべき板本がなかったことに加え
て、その両監本にしても必ずしも善本とは言い難かったことが
この壮筆を促した動機として考えられる。毛襄等の撰になる
「先府君行実」に「当洪武時、收書板入国子監、皆宋元旧板。
歷朝補刻、稍改旧觀。至北雍重刻、古字尽矣。府君（毛晉）慨
古本將不復見、所刻經史、皆得宋刻、補正文字、視兩官書為善
焉」とあるように、当時通行していた南監本正史は宋の原板を
全く失った所謂万曆二十一史で、刊行以後更に数次の補修を経
た濫損本であった。北監本にしても、この南監本に据った重刊
本である（前掲尾崎論文）。また恐らく万曆中にはすでに、明

初に印行された南監二十一史の善本は、明謝肇淛（字は在杭、福州
三〇・八六）が「百金索之海内、不易得也」（五雜俎卷一三 事部
三〇）の進士が「極めて稀少かつ高価なものだったのである。
」と云う如く、

「縁起」は続けて、
及築箭方輿、同人聞風而起、議聯天下大社列十三人任經部、
十七人任史部、更有欲益四人并合二十一部者。築舍紛紛、卒
無定局。余唯閉戸自課已耳。

と。毛晉の企図が知れわたり、この大事業を分担して遂行すべ
しという論議が起った。天下の大社、すなわち当時江南各地に
叢起した文社のうちの大きなもの、それと連繫して社中より各
經、各史に分任者の人選をしようというのであろう。しかしな
がらその論議は定まらず、結局は毛晉一人の手で敢行されたの
である。

また、錢謙益が「謂、經術之學原本漢唐。儒者遠祖新安、近
考余姚。不復知古人先河後海之義。代各有史、史各有事有文。
雖東萊武進以鉅儒、事鉤纂要以岐枝割剝、使人不得見宇宙之大
全。故于經史全書勸饑流布、務使學者窮其源流、審其津涉」
（牧齋有學集卷三一、隱湖毛君墓誌銘）と云う如く、毛晉が敢
えて經史の校刊にふみきったのは、当代の經学史学への批判的
な見解に基く。即ち、朱子を祖とする明代性理の学、殊に「四
書大全」「五經大全」「性理大全」に通曉すれば事足りた卒業の
ための学問、或は、いわゆる主觀唯心論「心即理」を説き、相
対的に經書を輕視した陽明学、史学においては、呂東萊の「十
七史詳節」の如き正史の節録をもって足れりとする学問態度へ

の批判であつた。この「経術之学原本漢唐」及び、史学は正史全書を讀破すべしとする見地は一個毛晉の偶感ではなく、当代文化社会の一思潮であり、祝允明(天順四(一四六〇)年生)の思想に淵源するとされている(宮崎市定 明代蘇松地方の士大夫と民衆 史林第三七卷第三号 一九五四年、アジア史研究第四京都 同朋舎 一九五七年 収)。また、明末崇禎初年に興つた張溥(字は天如、太倉の人、万曆三〇(一六〇〇)を中心とする復社の古学復興を唱導する文化活動に通ずるものでもあつた。毛晉の交友關係をたどるに、復社の領袖に仰がれた錢謙益、応社の明主顧夢麟(字は麟士、織華と号す、太倉の人、万曆三三(一六〇五)年生、永曆七(一六五三)年歿)、張溥を師とした呉偉業等があり、彼が復社と何らかの関りがあつたか、少なくともその文化活動と相反する立場にはなかつたであろうことを思わせる。従つて毛晉の十七史校刊という功業は、校刊者自らの思惑によつてなされたことではあるが、当時、経済的文化的に中国の最先端にあつた蘇州地方(宮崎市定 明清時代の蘇州と輕工業の發達 東方学二 一九五一年、アジア史研究第四 収)を中心とした文人士人の思潮に相応するものでもあつた。その蘇州文化の一面には清代浙西の考証学に通ずる學術思潮があつた。蘇州の奇人祝允明の思想に考証学の淵源を認め、古学復興を唱導した張溥を允明の思想の継承者とみなせば(宮崎市定 張溥とその時代 東洋史研究第三三卷第三号 一九七四年、アジア史研究第五 京都 同朋舎 一九七八年 収)、毛晉が經学は漢唐の古学に拠るべしと言ひ、勉めて古籍を蒐集し、悉く宋板に拠つたとする十七史校刊の姿勢は允明、溥に共通し、よ

り密接に清代考証学に通ずるものと言えよう。

「縁起」は更に続けて、

且幸天仮奇縁、身無疾病、家無外侮、密余自娛十三年如一日、迨至庚辰除夕、十三部板斬新挿架、頼鉅公淵匠、不惜玄晏、流布寰宇。不意辛巳壬午兩歲災祲、資斧告竭。亟棄負郭田三百畝以充之。甲申春仲、史亦裂然成帙矣。

とあり、崇禎元(一六二八)年に始まつた十三經十七史の校刊は、順調に毎年經史各一部ずつを開雕して同(一三(一六四〇)年(庚辰))に十三經が完結した。「辛巳壬午兩歲災祲」とは同一四・一五年に常熟地方を襲つた水災で、その為に資財底をつき、負郭田三百畝を売却してその用に充つるの已むなきに至つたが、同一七(一六四四)年(甲申)、所期どおり十七史の全帙が整つた。「縁起」末に付記された「編年重鐫經史目錄」に各經史の開雕及び補緝年が記され、また十七史各書首には開雕年月日を記した直行刊記がある。それに従つて以下各史の開雕年月を示すと、(各書名に冠した数字は開雕順次を示す)

- 14 史記一三〇卷 崇禎一四(一六四一)年正月
- 15 漢書一〇〇卷 同一五(一六四二)年二月
- 16 後漢書一二〇卷 同一六(一六四三)年三月
- 17 三国志六五卷 同一七(一六四四)年二月
- 1 晉書一三〇卷 同元(一六二八)年正月
- 7 宋書一〇〇卷 同七(一六三四)年四月
- 10 南齊書五九卷 同一〇(一六三七)年一〇月
- 6 梁書五六卷 同六(一六三三)年一二月

4 陳書三六卷 同 四(一六三一)年七月
 9 魏書一四卷 同 九(一六三六)年五月
 11 北齊書五〇卷 同 一(一六三八)年夏
 5 周書五〇卷 同 五(一六三二)年一月
 8 隋書八五卷 同 八(一六三五)年八月
 13 南史八〇卷 同 一三(一六四〇)年一月
 12 北史一〇〇卷 同 二(一六三九)年九月
 2 唐書二二五卷 同 二(一六二九)年正月
 3 五代史七四卷 同 三(一六三〇)年六月

となり、正史時代の順序には全くかわりなく刊行されている。「編年重鑑經史目錄」題下の自注に「随遇宋版精本攷校略無詮次」とある如くである。

上述の如く、崇禎一七(一六四四)年二月に三國志六五巻を開離し全史の校刊を終えたのであるが、ほどなく中国全土は驚天動地の大混乱に陥る。この年三月には流賊李自成のために北京は陥落し、崇禎帝は万歳山に縊死し明王朝は滅んだ。四月には清軍が山海關を突破、李自成は出奔、五月、吳三桂を先導に睿親王多爾袞が北京に入り、九月には順治帝福臨が藩陽より入城し華北は清朝の下に平らいだ。江南湖蘇地方は明季各地に跳梁跋扈した流賊からも清軍の侵略行為からも直接的な被害は免がれていたが、度重なる水災を被り、王朝衰勢の陰翳は色濃く士民に迫っていた。この年五月、南京では馬士英、史可法に擁立された福王由松が即位したが、廷臣はもっぱら党争を事として政権は定まらず、翌弘光元(一六四五)年(清順治二年)四

月には揚州が、五月には南京も陥落し、錢謙益・吳偉業等文武高官の多くが清朝に降った。蘇州もほとんど抵抗をみせず清軍の麾下に入ったが、蘇松の士民は義兵を挙げ降將新官の暴虐と辮髮令の強行に烈しく抵抗した。常熟も嚴斌、項志寧を主謀者として立ちあがったが衆寡敵せず、七・八月の内には江南一帯はほぼ平定された。このような大擾乱を目前にして十七史は完成した。「縁起」には前引の文に続けて、

豈料兵興寇發、危如累卵。分貯版籍於湖辺崑畔、茆菴草舍中。水火魚鼠、十傷二三。呼天号地、莫可誰何。猶幸數年以遑、邨居稍寧。扶病引雛、收其放失、補其遺亡、一十七部、連牀架屋、仍復旧觀。然校之全經其費倍蓰、奚止十年之田而不償也。

と述べてある如く、十三經十七史の版板は、兵乱を避けて隱湖沿辺の茆屋に分貯潛藏された間に、二・三割の損傷を蒙つたのであるが、やがて乱世が治まり平和がもどると幸いにもその版板を回収し、十七史については全史にわたって補修を加え旧觀を復するを得た。「編年重鑑經史目錄」によればその補修は順治戊子(五年一六四八)に始まる。以下その経緯を表示すると、

補修年 補修箇所
 順治 五年 晉書 載記三十卷

唐書 曾公亮進新唐書表目錄四十三葉
 六年 五代史 司天考二卷、職方考一卷、十国世家年譜一卷、陳師錫序一篇
 陳書 儒林文學列伝二篇

七年 周書 異域列伝二篇

梁書 皇后太子列伝二篇

八年 宋書 符瑞志三卷、百官志二卷

隋書 志三十卷

九年 魏書 志二十卷原欠天象三四

南齊書 輿服志一篇、高逸孝異列伝二篇

一〇年 北齊書 神武本紀二卷、後主幼主本紀一卷、列伝

散失八十八葉

北史 本紀十二卷

一一年 南史 列伝卷六十〜七十

史記 周本紀一卷、礼楽律曆書四卷、儒林列伝

五・六・七葉

一二年 漢書 藝文志一卷、文三王伝、賈誼伝、叙伝四卷

後漢書 八志三十卷

一三年 三国志 蜀志卷二〜七、上三国志表一篇

となり、崇禎年間の刊行順に従つて毎年二史ずつ補修がなされ、順治一三（一六五六）年に完了している。此年毛晉は五十八歳、崇禎元（一六二八）年三十歳で刊行を開始してより、実に二九年の歳月をこの公刊の為に費したことになる。「縁起」は最後に

回首丁卯至今三十年、巻帙從衡、丹黃紛雜、夏不知暑、冬不知寒、昼不知出戸、夜不知掩扉。迄今頭顛如雪、目睛如霧、尚屹屹不休者、惟懼負吾母誦尽之一言也。而今而後、可無憾矣。竊笑棘闈仮寐、猶夫牧人一夢耳。何崇禎之改元、十三年

之安堵、十七年之改歩、如鏡鏡相照、不爽秋毫耶、至如獎我罪我、不過夢中說夢、余又豈願人人與我同夢耶

と結んで擱筆する。この大業を果して二年余を生き、順治十六（一六五九）年七月二十七日六十一歳で毛晉は生涯を終えた。

汲古閣本十七史諸本略解

汲古閣刊十七史は校刊者晉自ら「隋唐宋版精本攷校」と自負する如く、各史とも宋刊本に据つて精校を経たものとみられ、明南北監本に比しテキストとして勝るものとされて来た。清中葉に及び考証学が隆盛を極めると種々校勘学上の難点がとりざたされてはいるが、そのことは逆に精善なるテキストとしての評価が定着していたことを物語る。清初ほぼ百年程の間は監本とともに中国国内はもとより隣邦我国に於ても弘く通行し諸儒必携の書と目され、伝存本よりみても南北監本に比して明らかに多く、流通盛行の様歴然の靚がある。清中葉以降は武英殿版系の二十四史が通行するが、その間も汲古閣刊本の流行はなお殷軫として重印補修が疊ねられ、覆刻翻刻もなされて清末葉にまで及んだ。然るにその間の事情については殆んど明らかにされてない現状にある。以下、現存諸本の調査に基いて、汲古閣刊十七史の印行、補修の経緯をたどり、覆刻本、翻刻本を含む汲古閣本の系統を明瞭にしておきたい。先ず現在までの調査結果を結論的に目録形式で示せば次の如くである。

尚、各版本の頭に附した数字は、後述解題標題上の数字に符合する。

1十七史 明毛晉校 明崇禎元—一七年刊〔常熟毛氏汲古閣〕
2又 清順治五—一三年修〔常熟毛氏汲古閣〕

史記一三〇卷 漢司馬遷撰 劉宋裴駟集解 明崇禎一四年

刊清順治一一年修

漢書一〇〇卷 漢班固撰 唐顏師古注 明崇禎一五年刊清

順治一二年修

後漢書九〇卷志三〇卷 劉宋范曄撰 唐〔李〕賢注〔志〕

〔晉司馬彪〕撰 梁劉昭注 明崇禎一六年刊清順治一

二年修

三國志六五卷 晉陳壽撰 劉宋裴松之注 明崇禎一七年刊

清順治一三年修

晉書一三〇卷 〔唐房玄齡等〕奉敕撰 明崇禎元年刊清順

治五年修

宋書一〇〇卷 梁沈約撰 明崇禎七年刊清順治八年修

南齊書五九卷 梁蕭子顯奉敕撰 明崇禎一〇年刊清順治九

年修

梁書五六卷 唐姚思廉奉敕撰 明崇禎六年刊清順治七年修

陳書三六卷 唐姚思廉奉敕撰 明崇禎四年刊清順治六年修

魏書一一四卷 北齊魏收奉勅撰 明崇禎九年刊清順治九年

修

北齊書五〇卷 唐李百藥奉勅撰 明崇禎一一年刊清順治一

〇年修

周書五〇卷 唐令狐德棻等奉勅撰 明崇禎五年刊清順治七

年修

隋書八五卷 唐魏徵·長孫無忌等奉敕撰 明崇禎八年刊清
順治八年修

南史八〇卷 唐李延壽撰 明崇禎一三年刊清順治一一年修

北史一〇〇卷 唐李延壽撰 明崇禎一〇年刊清順治一〇年

修

唐書二二五卷 宋歐陽修·宋祁等奉勅撰 明崇禎二年刊清

順治五年修

五代史七四卷 宋歐陽修撰 宋徐無黨注 明崇禎三年刊清

順治六年修

3又 附弘簡錄二五四卷統弘簡錄元史類編四二卷 〔清康熙末

雍正間〕印

4又 〔清乾隆間〕印

5又 〔至清乾隆末〕遞修

6又 附宋遼金元別史〔清嘉慶〕印〔常熟席氏掃葉山房〕

7又 遞修〔常熟席氏掃葉山房〕

8同 附弘簡錄二五四卷統弘簡錄元史類編四二卷旧五代史一五

〇卷明史三三二卷 〔清嘉慶道光間〕刊〔蘇州趙氏書

業堂〕覆汲古閣刊本

9漢書一〇〇卷·後漢書九〇卷志三〇卷 〔清〕刊 覆汲古閣

刊本

10二十四史附遼史拾遺二四卷 清同治八—光緒四年刊〔五書局〕

史記 清光緒四年刊〔江寧〕金陵書局

漢書 清同治八年刊〔江寧〕金陵書局

後漢書 清同治八年刊〔江寧〕金陵書局

- 三国志 清同治九年刊〔江寧〕金陵書局
 晉書附晉書音義三卷 清同治一〇年刊〔江寧〕金陵書局
 宋書 清同治一年刊〔江寧〕金陵書局
 南齊書 清同治一三年刊〔江寧〕金陵書局
 梁書 清同治一三年刊〔江寧〕金陵書局
 陳書 清同治一年刊〔江寧〕金陵書局
 魏書 清同治一年刊〔江寧〕金陵書局
 北齊書 清同治一三年刊〔江寧〕金陵書局
 隋書附清薛壽等考異 清同治一〇年刊〔揚州〕淮南書局
 南史 清同治一年刊〔江寧〕金陵書局
 北史 清同治一年刊〔江寧〕金陵書局
 旧唐書 清同治一年刊〔杭州〕浙江書局
 唐書 清同治二年刊〔杭州〕浙江書局
 旧五代史附考証 清同治一年刊〔武昌〕崇文書局
 五代史 清同治一年刊〔武昌〕崇文書局
 宋史 清光緒元年刊〔杭州〕浙江書局
 遼史附考証 清同治一三年刊〔蘇州〕江蘇書局
 遼史拾遺 清光緒元年刊〔蘇州〕江蘇書局
 金史附欽定金國語解一卷 清同治一三年刊〔蘇州〕江蘇書局
 元史附考証・元史氏族表三卷元史藝文志四卷 清同治一三年刊〔蘇州〕江蘇書局
 明史 清光緒三年刊〔武昌〕崇文書局
 清光緒一三年修〔五書局〕

- 12 後漢書九〇卷統漢志三〇卷 清同治一二年刊〔嶺東使署〕
 13 史記一三〇卷 清光緒八年刊〔上海 点石齋〕石印
 14 漢書一〇〇卷 清光緒二〇年刊〔同〕石印
 15 後漢書九〇卷統漢志三〇卷 清光緒二〇〔一八九四〕年刊〔同〕石印
 16 三国志六五卷 清光緒二〇〔一八九四〕年刊〔同〕石印
 1 崇禎原刊本
 汲古閣十七史は上述の如く明末崇禎元（一六二八）年より一七（一六四四）年にわたって継続して刊行されたのであるが、増訂四庫簡明目録標注卷五統録には「汲古閣十七史、並明崇禎時刊成。経乱未能合印、頗有損失。至清順治庚子修補完、乃通行。即以此時印者為初印。其明時初印、僅有一二單部、不能全觀也。」とあり、順治修以前の印本は單行本がわずかに存するのみで、一括合印されたものには違見できないとしている。崇禎一七（一六四四）年二月に刊行完了して程なく明清の王朝交替という乱世に遭遇し、翌清順治二（一六四五）年七月十三日には常熟県も清兵に蹂躪され「屠殺淫虜至慘酷」という有様であった。それゆえ、十七史の板木が潜藏されたのは刊成後でもない時期、恐らくは一年も経ない間のことであつたであろう。この間に十七史全史が合印されたと仮定したとして極めて少数であつたに相違ない。ましてや伝本の存在ともなれば殆ど期待出来ない。国内の諸文庫・図書館等の所蔵書についても、管見の限りではあるが、各史単行書ですら崇禎原刊本は現存せず、すべて順治修以後の印本であつた。ただ、北京図書館善本

書目史部冒頭に著録されている「十七史」は、あるいは未補修の原刻初印本ではないかとの期待を抱かせる。同目によればその本は陳氏捐贈本で二百二十四冊、全帙にわたって薄啓源により何焯等諸家の書人が移写されており、漢書、三國志、唐書、五代史を除く各史に、明末清初の藏書家葉方（一名樹廉、字石君、吳興の人）の批校並に手跋を存す。同目は他に汲古閣十七史単行書の明崇禎刊本として、史記七本、漢書三本、後漢書一本、三國志三本、北齊書、南史、北史、唐書、五代史各一本を著録する。史記には他に順治重修本二本があり、明らかに崇禎原刻本とは甄別して著録されているが、漢書以下は順治重修本の著録を見ない。果してその全てが崇禎原刊本であるや否や、実査を経っていない今、それと断ずることは危険であり今後の調査を俟ちたい。

2 清順治修本

明崇禎年間に刊行された一七史は清順治五（一六四八）年より同一三（一六五六）年までの九年を費して大がかりな補修がなされた。原刻初印本の見存するものは極めて稀であり、上引の増訂四庫簡目録標注に言う如く、普通に汲古閣十七史の初印本と言え、この補修完了時の印本である。管見によれば、その初印本も非常に少なく、康熙末より、乾隆に下る後印ないしは通修本がほとんどである。最も早印と見做される現存本は蓬左文庫蔵の一本（1691）尊経閣文庫蔵本並びに京都大学人文科学研究所蔵の一本（史113）で清康熙前期頃の印本とみれよう。以下、先ず蓬左文庫蔵本等早印本に拠って十七史の一般

的書誌事項を記し後に既見の見存各本についてその特徴を述べ。冊数下の括弧内は請求番号を示す。

「毛氏拠古本考較／十七史／史記（以下四行に亘り五代史に至る書名を列ね、末行下方に）汲古閣蔵版」の封面があり、各史首には「毛氏拠古本考較／史記（等と書名を大書）／汲古閣蔵版」の封面を有す（蓬左文庫蔵本には無い）。首に「汲古毛氏新刻十七史序」（強圉作噩〈丁酉〉之歲〈清順治一四年〉九月望日旧史／官虞山蒙叟錢謙益再拜謹序）、「重刻十七史序」（順治丁酉春杪之五日督漕／使者関中侯于唐書於構／李舟次）、「十七史序」（賜進士出身奉政大夫提督淮揚／蘇松常鎮徐州等処学政江南／提刑按察司僉事前礼部儀制／司員外郎西山張能鱗撰）並に順治一三（一六五六）年毛晉自撰の「重鐫十三經十七史緣起」（末に「編年重鐫經史目錄」を附す）を冠す。次に「司馬遷史記凡一百三十篇總一百三十卷」（以下低）十二本紀一十二卷／十表一十卷／八書八卷／三十世家三十卷／七十列伝七十卷／（九格）裴駟注」と史記總目（漢書以下各史首にも同様の総目を付す）、「史記目錄」並に「史記集解序」がある。各史首末の序跋等は、

三國志、總目前或は目錄後に「上三國志注表」（元嘉六年七月二十四日中書侍郎西郷侯臣裴松之上）

晉書、目錄前に「晉書本伝」（陳寿伝）及び「節録宋書裴松之伝」（この二伝は本来は三國志首に附載さるべきもの。後印本は三國志首に改置）並に「晉書載記序」

南齊書、目錄前或は後に宋曾鞏等の校定上書叙録、卷末に治平

月崇文院送杭州開板牒文

陳書、目錄末に直接し、宋曾鞏等の校定上書叙録

魏書、目錄後に宋劉恕等の校定上書叙録、志首に魏収の「前上

十志啓」

周書、目錄前に宋王安国等の校上序言

隋書、卷末に天聖二年勅付崇文院校勘雕造題名

唐書、総目前或は目錄後に「進新唐書表」(嘉祐五年曾公亮)

五代史、目錄前に陳師錫の「五代史記序」がある。

史記本文首は集解序末に直接し、「史記一」(下に小字双行注)

／五帝本紀第一」と題す。各史本文卷頭題署程式は、

高帝紀第一上(下に顔師古双行注、注下隔一〇格に)漢書一

／(低六)正義大夫行秘書少監琅邪郡開國子顔師古注

光武帝紀第一上(三格)後漢書一上／(低六)唐章懷太子賢注

(志首題、「律曆志上第一 律章 候氣(隔一)後漢書一(低一)

梁劉昭注補)

魏書一(隔一)三国志／武帝紀第一

晉書一／帝紀第一(格低二)宣帝

宋書卷一／本紀第一(格低二)武帝上

南齊書卷一／本紀第一(格低二)高帝上

梁書卷一／帝紀第一(格低二)武帝上

陳書卷一／本紀第一(格低二)高祖上

魏書卷一／序紀第一

北齊書卷一／帝紀第一(格低二)神武上

周書卷一／帝紀一(格低二)文帝上

隋書卷一／帝紀第一(隔九)特進臣魏 徵上(格低二)高祖上

(志各卷首第二行小題下は「大尉楊州都督監脩國史上柱國

趙国公臣長孫孫無忌等奉救撰」とある)

南史卷一／宋本紀上第二(格低二)武帝(格低二)少帝

北史卷一／魏本紀第一

本紀第一(隔八)唐書一

五代史第一(低一)徐無党注／梁本紀第一(下注小字双

とあり、前後漢書並に唐書は大題を下に小題を上し、署し旧式を

襲っている。

版式は各史共通で、左右双辺(史記卷一首匡廓内辺二・三

×一四・六釐)有界一二行、行二五字、注小字双行、行三七字。

版心白口單黒魚尾(史名)幾(丁付)、各卷首葉と末葉には

中縫に「汲古閣毛氏正本」とある。また各史とも、各卷首或は卷

末に「琴川毛鳳苞氏審定宋本」と小字篆文の長方小木記を刻

す。

各史とも総目葉うら第一行或は二行に次の直行刊記があり、

南齊書・魏書・隋書を除く各史には次行下方に「毛／晉」「子／

九氏」の篆文小方印記を刻す。

史記 皇明崇禎十有四年歲在昭陽大荒駱歐月上日琴川毛氏開雕

(次行低一〇格「索隱曰昭陽辛也爾雅曰在辛曰重／光在巳曰

大荒落今從歷書天官書」と小字双行注あり)

漢書 皇明崇禎十有五年歲在橫文敦祥如月初吉琴川毛氏開雕(次

行低一〇格小字双行注)

後漢書 皇明崇禎十有六年歲在尚章叶洽病月上巳琴川毛氏開雕

(次行低一〇格小字双行注)

三國志 皇明崇禎十有七年歲在闕逢涪灘如月花朝琴川毛氏開雕

晉書 皇明崇禎改元歲在著雍執徐陝月元宵琴川毛氏開雕

宋書 皇明崇禎七年歲在闕逢閹茂余月八日琴川毛氏開雕

南齊書 皇明崇禎十年歲在強圉赤奮若陽月望日琴川毛氏開雕

梁書 皇明崇禎六年歲在昭陽作噩涂月望日琴川毛氏開雕

陳書 皇明崇禎四年歲在重光協洽相月七夕琴川毛氏開雕

魏書 皇明崇禎九年歲在柔兆困敦旱月端午琴川毛氏開雕

北齊書 皇明崇禎十有一年歲在著雍攝提格夏五日至琴川毛氏開雕

周書 皇明崇禎五年歲在玄默涪灘寧月冬至琴川毛氏開雕

隋書 皇明崇禎八年歲在旃蒙大淵猷壯月中秋琴川毛氏開雕

南史 皇明崇禎十有三年歲在上章執徐十一月上弦琴川毛氏開雕

北史 皇明崇禎十有二年歲在屠維單閼玄月重九琴川毛氏開雕

唐書 皇明崇禎二年歲在屠維大荒落陝月上日琴川毛氏開雕

五代史 皇明崇禎三年歲在尚章敦牂且月望日琴川毛氏開雕

次に掲げる各所備蔵本はほぼ同時期の早印本である。

蓬左文庫蔵 大二六八冊(169 1)

第一	二二冊	史記	二二三冊	第二四	一六〇冊	漢書	三七冊
第八	一八〇冊	後漢書	二〇〇冊	第八一	一八八冊	三國志	二八冊
第九	一一二冊	晉書	二四四冊	第一三	一三三冊	宋書	二〇冊
第三三	一三三冊	南齊書	六冊	第一三一	一四四冊	梁書	六冊
第四五	一四八冊	陳書	四冊	第一四九	一六八冊	魏書	二〇冊
第一九	一一七冊	北齊書	四冊	第一七三	一七八冊	周書	六冊
第七九	一〇〇冊	南史	一一二冊	第一九一	一一〇冊	北史	二〇冊
第一二	一一二冊	隋書	一一二冊	第二三	一二六冊	唐書	四〇冊
第六三	一一六冊	五代史	六冊				

後補黄色絹表紙(二九×一八・七釐)白裂地の題簽に書名並に冊次が墨書さる。封面なし。侯于唐「重刻十七史序」を欠く。

「張府内/庫圖書」(朱長方)、「時行/之章」(白方、末冊題簽のみ)の印記がある。次掲の尊経閣文庫、京都大学人文科学研究所蔵本とともに字画明晰紙刻精良なる早印本である。

尊経閣文庫蔵 欠隋書卷三四・三五 大三九八冊

第一	二〇冊	史記	二〇〇冊	第二一	一五四冊	漢書	三四冊
第五	一八〇冊	後漢書	二六冊	第八一	一六〇冊	三國志	二八冊
第九	一一三冊	晉書	三六冊	第一三	一一六〇冊	宋書	二八冊
第一六	一一七〇冊	南齊書	一〇〇冊	第一七	一一七〇冊	梁書	一〇冊
第一八	一一八六冊	陳書	六冊	第一七	一一三〇冊	魏書	三四冊
第二一	一二六冊	北齊書	六冊	第二二	一一三四冊	周書	八冊
第二五	一五九冊	(第二四八冊は欠本)		第二八	一一二四冊	隋書	二四冊
第三〇	一八八冊	南史	二〇冊	第三二	一一三九冊	北史	三八冊
第三三	一八七冊	唐書	六八冊	第三八	一一三九八冊	五代史	二〇冊

「十七史」の封面あるも各史首の封面はない。侯于唐「重刻十七史序」を欠く。各史首に「汲古/閣」(白方)の印記あり。魏書卷七下第一葉に料紙製造工廠の牌子と思われる「欺霜」の朱印を存す。「嘉賓/字/孔昭」(朱方)、「知止/堂」(白方)、「家在九/峻高処」(朱長方)、「前田氏/尊経閣/圖書記」(朱方)の印記あり。

京都大学人文科学研究所蔵 大二二〇冊(史113)

第一	一〇冊	史記	一〇〇冊	第一一	二六冊	漢書	一六冊
第二	一一七冊	後漢書	二二冊	第三九	一一五〇冊	三國志	二二冊
第五	一一七〇冊	晉書	二〇冊	第七	一一一八六冊	宋書	一一冊
第八	一一九二冊	南齊書	六冊	第九	一一一八八冊	梁書	六冊
第九	一一二〇冊	陳書	四冊	第一〇	一一三二冊	魏書	二〇冊
第一三	一一二六冊	北齊書	四冊	第一二	一一三二冊	周書	六冊
第一三	一一四四冊	隋書	二二冊	第一四	一一五六一冊	南史	一一冊
第一五	一一七六冊	北史	二〇冊	第一七	一一二四冊	唐書	三八冊
第二二	一一三〇冊	五代史	六冊				

後漢書及び三國志の封面を欠く。錢謙益の序欠落。梁書の総目刊記の一葉は卷末に誤綴さる。各史首封面右下方に「毛氏/正本」(朱方)、「汲古/閣」(白方)の印記あり。

同蔵 大二五〇冊(史115)

第一一	一四冊	史記	一四冊	第一五	一四〇冊	漢書	二六冊
第一二	一四冊	後漢書	一四冊	第一六	二二冊	三國志	一八冊
第一三	八二冊	晉書	二〇冊	第一七	九八冊	宋書	一六冊
第一四	一〇六冊	南齊書	八冊	第一八	一〇七冊	梁書	六冊
第一五	一三二冊	陳書	四冊	第一九	一四二冊	魏書	二六冊
第一六	一四六冊	北齊書	四冊	第二〇	一四七冊	周書	四冊
第一七	一四六冊	隋書	一〇冊	第二一	一五〇冊	南史	四冊
第一八	一四六冊	北史	二四冊	第二二	一七六冊	唐書	四四冊
第一九	一四六冊	五代史	六冊	第二三	一四四冊	唐書	四四冊

漢書卷一四及び卷一五首―第二三葉は配鈔。侯于唐の序を欠く。隋書の封面欠落。「習教」/館/藏書(朱方)の印記あり。

同蔵 大二七八冊(史114)

第一一	一四冊	史記	一四冊	第一五	一三三冊	漢書	二四冊
第一二	一四冊	後漢書	一四冊	第一六	一三三冊	三國志	一八冊
第一三	九〇冊	晉書	二四冊	第一七	一三三冊	宋書	二〇冊
第一四	一一一冊	南齊書	八冊	第一八	一三三冊	梁書	六冊
第一五	一三二冊	陳書	四冊	第一九	一三三冊	魏書	二四冊
第一六	一四六冊	北齊書	六冊	第二〇	一三三冊	周書	四冊
第一七	一四六冊	隋書	一六冊	第二一	一三三冊	南史	一六冊
第一八	一四六冊	北史	二四冊	第二二	一三三冊	唐書	五〇冊
第一九	一四六冊	五代史	八冊	第二三	一三三冊	唐書	五〇冊

纔に欠葉補写葉あり。十七史封面は前掲尊経閣本及び同所蔵二本とは覆刻の關係にあり、この方が後出と思われる。右上方に「汲古/閣(白方)の印記あり。各史首の封面は無いが史記のみ模写されている。「晋書本伝(陳寿伝)及び「節録宋書裴松之伝」は三國志首に配さる(二六九頁参照)。魏書首の校定上書叙録を欠く。三國志卷六及び南齊書卷四五の末葉は、後述の後印本も含め他本では、本文が前葉で終り尾題のみが刷印されているが、此本はその末葉を欠き、前葉本文末に他本にはない「琴川毛鳳苞/氏審定宋本」の篆文小木記が刻入されている。但し、同版である。「知止/堂(白方)」「嘉賓/

字/孔昭(朱方)、「新日/吉蔵(朱方)、「静観亭/図書記(白長方)の印あり。

次の二本はやや後刷りで封面を欠く。

無窮会図書館蔵 史記末に史記索隱三〇卷、五代史末に五代史補五卷附五代史闕文一卷各一冊を附す。大二五〇冊(真軒584)

第一	一七冊	史記	一七冊	第一	一八冊	史記索隱	一冊
第二	一四冊	漢書	二四冊	第二	一八冊	後漢書	一八冊
第三	一四冊	三國志	一八冊	第三	一八冊	晉書	二四冊
第四	一四冊	南史	一六冊	第四	一八冊	宋書	一六冊
第五	一四冊	南齊書	七冊	第五	一八冊	梁書	五冊
第六	一四冊	陳書	四冊	第六	一八冊	魏書	二四冊
第七	一四冊	北齊書	二冊	第七	一八冊	周書	四冊
第八	一四冊	隋書	一六冊	第八	一八冊	南史	一六冊
第九	一四冊	唐書	四〇冊	第九	一八冊	唐書	一〇冊
第十	一四冊	五代史補	一冊	第十	一八冊	五代史	六冊

史記全一七冊の内首一〇冊(首四六卷)及び南史全一二冊はやや後印本を以って補配され、また後漢書、隋書には他史にはない蔵書印が捺された取り合せ本である。南史卷二九第一〇葉に「李方成号」、同卷五六第一〇葉に「□□号本廠/荆川太史紙」、北史卷五八第一葉に「吳義利号」の料紙製造廠の牌号を存す。史記・漢書・後漢書・三國志・晋書・南史・北史・隋書・唐書・五代史に文政一一(一八二八)年より天保三(一八三三)年に及ぶ下村貫考等の校語書入がある。対校本は主として明南監本及び北監刊清康熙二年修本であるが、史記は史記評林、唐書は和刻本、旧唐書との校合がなされ、所々次の朱筆校読識語がある。

以北板二十一史校合正誤/天保三壬辰六月十六日卒業(後

漢書(伝卷末補写料紙)
天保二辛卯仲夏七日校合了常重

同校 (三国志卷四五末)
為意 元亨 實考

以康熙重修二十一史北雍本一校 (晉書目錄首)

戊子八月十三日實考以雍本同校 (同卷二末)

戊子仲秋十九日以南北雍本一校 / 貫考 (同卷八末)

戊子八月二十一日以南北雍本一校 / 鱗川 (同卷一〇末)

文政十二己丑歲五月廿三日校合卒業 (同卷三〇末)

戊子九月廿一日一校 (同卷四六末)

戊子十月廿四日一校了 (同卷六〇末)

文政十二己丑歲仲夏端午一校 貫考 (同卷一三〇末)

文政十三年仲春花朝前一日卒業 常重 同校 (南史卷八〇末)

以康熙重修廿一史北板本校合卒業 于時文政十三年十一月廿七日

同校 (北史卷末)

政熊 實考 遺常 鱗川 下村實考

七月初四校読竣功 (五代史卷末)

「晴雪齋/函書記」(朱長方・後漢書首)、「楨祥/黃記」(朱

長双円・南齊書卷七第二葉裏)、「吳伊仲/藏書」(朱方・隋

書)、「成瀬/当職」(白方)、「大嶋/寛」(白方・史記首一〇

冊)等の印記あり。

京都大学文学部蔵 大二四〇冊 (Ba 9-1)

- | | | | | | | | |
|------|------|-----|-----|------|-------|-----|-----|
| 第一 | 一四冊 | 史記 | 一四冊 | 第五 | 一三八冊 | 漢書 | 二四冊 |
| 第三九 | 一五四冊 | 後漢書 | 一六冊 | 第五九 | 一六四冊 | 三国志 | 〇冊 |
| 第五一 | 一八八冊 | 晉書 | 二四冊 | 第八五 | 一〇四冊 | 宋書 | 一六冊 |
| 第一〇五 | 一一〇冊 | 南齊書 | 六冊 | 第二二一 | 一一二六冊 | 梁書 | 六冊 |
| 第一七一 | 一三〇冊 | 陳 | 一 | | | | |

- | | | | | | | | |
|------|-------|-----|-----|------|-------|----|-----|
| 第一四一 | 一一四四冊 | 北齊書 | 四冊 | 第一四五 | 一一五〇冊 | 周書 | 一六冊 |
| 第一五一 | 一一六二冊 | 隋書 | 一二冊 | 第一六三 | 一一七四冊 | 南史 | 一〇冊 |
| 第一七五 | 一一九四冊 | 北史 | 二〇冊 | 第一九五 | 一二三四冊 | 唐書 | 四〇冊 |
| 第二三五 | 一二四〇冊 | 五代史 | 六冊 | | | | |

十七史及び各史首の封面なし。纔に欠葉補写葉あり。張能
鱗、侯于唐の二序を欠く。「祖父手沢/子孫珍藏」(朱方)の
印記あり。

十七史は順治年間の補修が成るに従って一書ごと単行頒布さ
れたであろうし、全史の補修完了後も、全書揃って同時に印刷
されたばかりでなく、需要に応じて各史ごとそれぞれに抽印さ
れることもあったであろう。また元來同時に印行されたもので
も年代を経る間に四散したものも多い。従って現在諸収蔵機関
には単行本の形で配架されているものが多い。以下の諸秩はそ
の内でも早印本の部類に入る。

東京大学総合図書館蔵 史記 大一二冊合六冊 (G30 451)

南齊文庫。十七史の封面を存す。封面及び史記書扉左下方に

「毛氏/正本」(朱方)、「汲古/閣」(白方)の二印を鈐す。

「剛堂/函書」(朱方・徳川家茂)、「紀伊徳川・南葵/文庫」

(朱方)、「学習/館記」(朱方)、「旧和歌山/徳川氏蔵」(朱

方)の印記あり。

同蔵 史記存卷二三一三〇、六一一七六 大二冊 (G30 743)

隋書存卷五五—一六七 大二冊 (G30 743)

「史四(八)」「隋十二(十三)」と書根字がある。史記には墨
句点、眉上に音注等の標注書入あり。「豊壤/後人」(朱方)、
「趙印/尚綱」(白方)、「子/章」(朱方)、「五世/銓部/口

翰／経筵」(朱方)、「鶴／塘」(朱方)の印記あり。

和歌山大学附属図書館蔵 漢書 大一一冊(223.6)

封面左下方に「毛氏／正本」(朱方)、「汲古／閣」(白方)の

二印を鈐す。一部朱句点、眉上に校語等の書入がある。「学習／館記」(朱方)の印記あり。

東京大学総合図書館蔵 漢書大一一冊合六冊・後漢書大一一冊

合六冊(G30.226)

処々朱句点圈点声点朱引等の書入、眉上に清人による朱墨両筆の諸書よりの引抄等標注並按語がある。漢書の司馬相如伝、公孫弘卜式伝、東方朔伝、韋賢伝等には行間及び欄脚に文選、史記、宋本、汪文盛本、明嘉靖南監本等との校合書入が詳密である。後漢書の一部にも嘉靖南監本との校合書入あり。「滇南何傳慶送存京都／前門内 願学堂義塾」(朱長方)の印記あり。

同蔵 後漢書 大二〇冊合五冊(G30)

三条実憲寄贈本。「青蓮／王府」(朱方)、「三条／之印」(朱方)の印記あり。

慶應義塾図書館蔵 晋書 大一一冊(1004.87)・宋書 大一二冊

(1004.86)

田中文庫。後補空押出つなぎ茶色表紙、外題は「晋書(宋書)幾」と、右肩に「目錄／本紀」等と墨書する。晋書首の「晋書本伝」(陳寿伝)及び「節録宋書裴松之伝」はなく、「晋書載記序」は載記三〇巻首に配す。

同蔵 南齊書 大六冊(1004.80)・陳書 大四冊(1004.77)・北齊書

大四冊(1004.14)

田中文庫。後補空押出つなぎ香色表紙、外題「南齊書幾」等と墨書、目錄外題あり。「八霞／山房」(朱方)の印記。

同蔵 梁書 大六冊(1004.74)・南史 大一一冊(1004.68)

田中文庫。後補縹色花卉文様錦繡裂表紙、外題は朱框香色裂題簽に「梁書(南史)幾至幾」と墨書。封面無し。「八霞／山房」(朱方)の印記。

天理図書館蔵 五代史 大七冊(222.191②)

「棲鸞堂／圖書記」(朱長方)の印記あり。

3 「清康熙末雍正間」印本

前掲諸本よりやや後刷の本になると、弘簡録二五四巻及び続弘簡録元史類編四二巻が付印され「二十一史」と称して通行した。(注1)弘簡録は明邵経邦(字仲徳、仁和の人。明正徳一六(一五二二)年の進士。弘治四(一四九二)年生。嘉靖四四(一五六五)年)撰。宋鄭樵の通志を継承し、唐より金に至る九代の歴史を著したものである。本書首の経邦四世の孫遠平(字は呂球、或三六六四)の「重刻弘簡録序」及び康熙二七(一六八八)年の遠平の子錫蔭の「重刻弘簡録後序」に拠れば、この書は明代已に刊行されていたが明末、家蔵の書板ともに焼失した。後清康熙一八(一六七九)年、遠平が詔を奉じて明史纂修に預つた際に幸にも閩中に於て一本を購得するをえ、その本に拠つて遠平自ら校正重刊したものが本版である。続弘簡録元史類編は邵遠平撰。祖経邦の志を継ぎ元一代の事跡を編んだもの。首の凡例に「是編成於康熙癸酉(三三)年之秋、進呈於己卯(三八)之春」とあり、自序に「付諸劄劄藏於家、以示後起者」とあるから、

此の両書は康熙年間の刊本とみてさしつかえない。また、この両書の乾隆以後の印本は、高宗の諱を避け、封面題字の「弘」字を「宏」と改め、本文巻頭内題或は版心題等に頻出する「弘」字の末画がほとんど遺漏なく削去加修されている。従って加修以前の版本は雍正以前に印行されたものと見做しえ、それと同時に合印されたと思われる以下に挙げる十七史諸帙は康熙雍正間印と推定可能である。

この時期以後の印本は、書型が、大本ながらやや小振りとなり、十七史冒頭並に各史首の封面が失なわれ、首の三序のうち、錢謙益の序のみを残し、張能鱗、侯于唐の序を欠く。全体に板木の損傷が多くなり、後漢書目録の第七・八葉は上部三分の一ほどのところで上下二つに割れ、上半部分は第七葉分を第八葉に、第八葉分を第七葉に誤って刷印され、以後嘉慶年間にこの二葉が改刻補修されるまで、この誤謬は踏襲されることになる。また、唐書首の総目・刊記の一葉が欠版となる。

尚、本来「三国志首」にあるべき「晉書本伝」(陳寿伝)及び「節録宋書裴松之伝」が、早印本では晉書首に置かれていたが、この時期の印本になると不思議と皆一様に陳書巻頭に誤綴されている。

内閣文庫蔵 十七史 大三〇〇冊(28141)、弘簡録・統弘簡録
元史類編 六一〇〇冊(28682) 南史卷三九配鈔。

第一一六冊	史記	一六冊	第一七一四冊	漢書	三〇冊
第四七六冊	後漢書	三〇冊	第六七二冊	三國志	二二冊
第七九〇八冊	晉書	三〇冊	第一〇九一三冊	宋書	二四冊
第二三三四〇冊	南齊書	八冊	第一四一四八冊	梁書	八冊
第一四九一五二冊	陳書	四冊	第一五三二七六冊	魏書	二四冊

第一七七一八二冊	北齊書	六冊	第一八三一八八冊	周書	六冊
第一八九二〇四冊	南史	一六冊	第二〇五一二八冊	北史	二四冊
第二九一四四〇冊	隋書	一六冊	第二四五一二九二冊	唐書	四八冊
第二九三三〇〇冊	五代史	八冊			

淡茶色表紙(二五・四×一六・六種)、弘簡録・統弘簡録元史類編は十七史とは別に配架されているが、装訂印記等からみるに元来は一揃いのものである。帙も同種でともに「滋賀県／売却之証」の印が鈴されている。漢・晉・梁・陳・魏・北齊・南・北史等諸史に処々朱句点校語標注等の書入あり。「遵義／堂／函書」(朱方)、「大日本／帝國／函書」(朱方)、「太政官／文庫」(朱方)の印記あり。

東京都立中央図書館蔵 欠史記 大三六八冊(222KW2) 五代史卷二五—三二配鈔。佐藤立軒、春田九皇等校本。

第一一三〇冊	漢書	三〇冊	第三一一六〇冊	後漢書	三〇冊
第六一七六冊	三國志	一六冊	第七七一四冊	晉書	三六冊
第一一三〇冊	宋書	三〇冊	第一四三一四冊	南齊書	二冊
第一五五一六四冊	梁書	三〇冊	第一六五一七〇冊	陳書	六冊
第一七一〇六冊	魏書	三六冊	第二〇七二四冊	北齊書	八冊
第二一五二二二冊	周書	八冊	第二三三二四二冊	隋書	三〇冊
第二四三二二六冊	南史	二〇冊	第二六三二九八冊	北史	三六冊
第二九一三五八冊	唐書	六〇冊	第三五九一三六八冊	五代史	一〇冊

河田文庫。南齊書首の総目・刊記及び「南齊書序」は南史末に誤綴。ほとんど全史にわたって朱墨の句点、眉上に校語或は錢大昕等諸家よりの引抄書入がある。漢書卷四卷末に朱筆で「安政五年戊午六月十四日読了 立軒稿」と読書識語、唐書卷一一末に朱筆で「門人春田翼読」と校読識語、また後漢書第二六冊見返(志首)に錢大昕十駕齋養新録の一条を引き校語を付し末に「明治壬午(一五年)端五 翼?識」と墨書、三國志卷四五末には「明

春田翼校読」と校読識語、また後漢書第二六冊見返(志首)に錢大昕十駕齋養新録の一条を引き校語を付し末に「明治壬午(一五年)端五 翼?識」と墨書、三國志卷四五末には「明

治庚辰（三十七年）二月念八日与省つとむ處つとむ弟つとむ警校「柳りゅう莊じょう」と朱の校読識語がある。

佐藤立軒、名は槐、新九郎と称す。一斎の第三子。明治一八（一八九二）年没。春田鶴、九阜・葆真庵と号す。佐藤一斎の門人。文久二（一八六二）年歿、享年五十一。「愛日楼藏弄」（朱長方）、「風自楼藏弄」（朱長方）、「愛警廬珍襲」（白長方）、「深青書／巢架藏」（朱長方）の印記あり。佐藤一斎、立軒、河田迪齋通藏。

尚、同文庫架藏の弘簡録八二冊（222KW4）及び続弘簡録元史類編二〇冊（222KW5）は、同じく一斎、立軒、迪齋通藏本で同様の印記を有するが、元来は此の十七史とは別行の補配本である。即ち、弘簡録第二至三〇冊は、弘字末画を欠く乾隆修本で「東叡山／青龍院」（白長方）の印記を有し、弘簡録第三一冊以下及び続弘簡録元史類編全帙は未修の康熙刊本で「思永館」（朱円）の印記を有し伝来を異にする。弘簡録首冊は補写で原首目を輯め末に「明治十一年三月借寧海家子藏書／托松平南泉補写 柳莊りゅうじょう釐記」の識語がある。

神宮文庫藏 欠後漢書・晉書卷一〇三一・五・弘簡録首七二卷。

史記二〇冊（五乙二い1809）・漢書四〇冊（同ろ1857）・三國志一二冊（同ろ1913）・晉書三九冊（同ろ1941）・宋書三〇冊（同ろ1961）・南齊書一二冊（同ろ1991）・梁書八冊（同ろ2016）・陳書六冊（同ろ1968）・魏書三六冊（同ろ1870）・北齊書八冊（同ろ2002）・周書八冊（同ろ1919）・隋書二〇冊（同ろ1944）・南史二〇冊（同ろ1987）・北史三〇冊（同ろ1998）・唐書六〇冊（同ろ1978）・五代

史一〇冊（同ろ1909）・弘簡録七〇冊（同い1794）・続弘簡録元史類編二〇冊（同ろ1963）

各史別々に配架されていて十七史として纏ってはいないが、装訂・印記等からみて同文庫目錄第五門歴史部門に著録されている以上の諸書は元来は一揃いのものと認められる。錢序末に「天保壬辰（三年一八三二）九月望開読護屋紀中倫／藍句者星渚江先生也」と、また史記卷四末に「九月十九日句畢此本止于此／次読後漢書」と朱の校読識語がある。「素読所／圖書記」（朱長方）、「星渚／書房」（白長方）、「林崎文庫」（朱長方）、「神宮／教院」（朱方）の印記。

次に掲げる三本は、晉書卷一一九第九・一〇葉の二葉を欠く。更に後刷の本になるとこの二葉は覆刻補修される。

蓬左文庫藏 十七史 三〇〇冊（1251）・弘簡録八〇冊（125

1）・続弘簡録元史類編二〇冊（1251）

第一	一六冊	史記	一六冊	第一七	四六冊	漢書	三〇冊
第四七	一六冊	後漢書	二〇冊	第六七	一七八冊	三國志	一二冊
第七九	一〇八冊	晉書	三〇冊	第一〇九	一七八冊	宋書	二〇冊
第九一	三八冊	南齊書	一〇冊	第一三九	一四六冊	梁書	八冊
第一四七	一五〇冊	陳書	四冊	第一五一	一七四冊	魏書	二四冊
第一七五	一八〇冊	北齊書	六冊	第一八一	一八八冊	周書	八冊
第一八九	二〇四冊	南史	一六冊	第二〇五	二二八冊	北史	二四冊
第二一九	二四冊	隋書	一六冊	第二三五	二九二冊	唐書	四八冊
第二九三	一〇〇冊	五代史	八冊				

漢書卷二八上第二七葉料紙に「開泰号」、晉書卷一一二第二五葉料紙に「五德源号本／廠選料放筐」の牌号を存す。「開泰号」の印は次掲の京都大学人文科学研究所藏本の魏書卷二四第二二葉、隋書卷七一第一四葉等にも見留められる。「尾府

／内庫／図書（朱方）の印記あり。

京都大学人文科学研究所蔵 大三一〇冊（史112）

第一	二〇冊	史記	二〇冊	第二	一	五〇冊	漢書	三〇冊						
第五	一七〇冊	後漢書	二〇冊	第七	一	八二冊	三國志	二冊						
第八	三一	一冊	晉書	三〇冊	第一	三	一冊	宋書	三〇冊					
第一	三	一冊	南齊書	〇〇冊	第一	四	三	一冊	梁書	八冊				
第一	五	一	五四冊	陳書	四冊	第一	五	一	一冊	魏書	三〇冊			
第一	八	五	一	九〇冊	北齊書	六冊	第一	九	一	一冊	周書	八冊		
第一	九	一	一	二八冊	隋書	二〇冊	第一	九	一	一	一冊	南史	二〇冊	
第一	九	一	一	二八冊	北史	二四冊	第一	九	一	一	一冊	唐書	五〇冊	
第一	九	一	一	二八冊	五代史	八冊	第二	六	三	一	一	一冊	唐書	五〇冊

弘簡録・続弘簡録元史類編の付印はない。南齊書末葉裏の料紙剪去、従って宋曾鞏等の校定上書叙録を欠く。

天理図書館蔵 史記一六冊（22459）・漢書二四冊（22461）・後漢書二〇冊（22467）・三國志二冊（22473）・晉書三〇冊（22487）・宋書二〇冊（22479）・南齊書一〇冊（22475）・梁書八冊（22473）・陳書四冊（22485）・魏書二四冊（22477）・北齊書六冊（22483）・周書八冊（22487）・隋書一六冊（22489）・南史一六冊（22475）・北史三〇冊（22477）・唐書四八冊（22489）・五代史八冊（22491）、弘簡録七九冊・続弘簡録元史類編二〇冊（22472）

晋書の総目・刊記葉を欠く。「五代史記序」を唐書末に誤綴。本帙も各史単行書として扱われ、正史類の諸書に入り雑って配架されているが、河内岡田氏の旧蔵書で、「河内／岡田／文庫」（朱方）、「河陽岡村／岡田氏蔵」（朱長方）の印記を有する。他に「番雲書／屋蔵章」（朱長方）の印記あり。

同蔵 宋書二〇冊（22479）・南齊書一〇冊（22473）・梁書八冊

（22449）・陳書四冊（22485）・北齊書六冊（22483）・周書八冊（22487）・隋書二〇冊（22489）

広池千九郎寄贈本。「広池／蔵書」（朱方）の印記。此の七史は広池氏の旧蔵本であるが、ほぼ同時期に印行された本の取合せ本である。但、隋書二〇冊のうち後一〇冊はやや後出の印本で補配され、第一九・二〇冊末の護紙に一八七七（清光緒三）年二月八日上海八仙橋東林華書院発売の万国公報の首頁が用いてある。同書前一〇冊には一部朱の書入があり、各冊の後表紙には「松下村塾」「松下塾用」等の題署がある。第九冊後表紙に「本号定版荆／川太史紙」の牌号を存す。

静嘉堂文庫蔵 漢書二四冊（4025）・後漢書二四冊（4030）

田中頼庸旧蔵。後漢書卷四〇上・四二・四四・四五・四六首二葉並配鈔。

東京大学総合図書館蔵 後漢書二〇冊合一〇冊（G30）

卷四〇上・四二・四四・四五の首二葉は新補料紙四葉を用いて補写、朱青の句点、眉上に校語等の書入。「紀伊徳川・南葵／文庫」（朱方）、「学習／館記」（朱方）の印記あり。

天理図書館蔵 宋書二〇冊（22479）

松平定信旧蔵。総目・刊記の葉を欠く。「越溪文庫」（長方）、「立教館／図書印」（朱長方）、「桑名」（朱円）の印記あり。大東急記念文庫蔵 南史二〇冊（12420/1407）

頼山陽手沢本。眉上に墨筆の校字書入あり。「山陽／外史」（白方）、「頼襄／之印」（白方）、「頼襄／之印」（朱方）の印記あり。

国会図書館蔵 南史二〇冊 (222・046-R-21n-⑧)
内閣文庫蔵 北史二四冊 (2803)

昌平坂学問所本。わずかに補写葉あり。卷一八第二二葉料紙に「福建童光大号／本廠監製名紙」の朱牌号を存す。墨筆の句点・訓点、眉上に南監本及び魏書、北齊書、周書、隋書等との校勘書入があり、後更にその書入に朱筆で訂正が施されている。卷一尾題前に墨筆で「丙寅九月廿五日読畢丁卯五月十八日晚校 樵」と、卷二末に「丙寅九月二十七日夜施点下句読畢同二十八日夜重校〔同〕字以下右傍に朱筆で『丁卯五月十九日二更半校完』と訂正」等と每卷末に校読識語があり、卷一〇〇末の「丁卯五月十七日午後読畢／同十一月十八日校 柴樵」に及んでいる。此の識語より、丙寅九月廿五日より翌丁卯五月十七日に至るほぼ八ヶ月の間に句点・訓点が施され、同年同月翌日より直ちに校合及び訓点の訂正が始められ、六ヶ月を総て同年十一月十八日に完了したことが知られる。「樵」「柴樵」とは横山僮人か。僮人、名は樵。僮人はその号、江戸の儒者、古賀精里の門に学び、昌平齋に入り、一年足らずの内に二十二史を通覧したといわれる。文化元年学問所の出役に抜擢され、同七年九月十六日歿す。丙寅・丁卯は文化三・四年であろう。各冊末に「享和辛酉」の朱印があり、「昌平坂／学問所」(墨長方)、「浅草文庫」(朱長方)、「日本／政府／図書」(朱方)の印記あり。

4 「清乾隆間」印本

以下に掲げる諸帙が乾隆印本と推定されるのは、同時に合印

頒行された弘簡録及び続弘簡録元史類編(註12)中にみえる「弘」字の末画が、高宗乾隆帝の諱を避けて削去されていることと、錢謙益の「汲古毛氏新刻十七史序」を欠くことに拠る。

錢謙益と毛晋との交友が深かったことは緒言でふれたが、その因縁で謙益は十七史、十三經に序文を贈っている。明末清初にかけて政客として或は文人、經学者として声名高かった謙益であるが(註2参照)、康熙三(一六六四)年に歿して後百年に及び、乾隆帝は謙益の文学所論を悉く抹殺しようとして著作の全てを禁燬の対象とした。著書のみならず、諸書に引かれた彼に関する記述、批語評論はもとよりその姓名をも全て抽燬されるという徹底した禁圧であった。従って謙益所撰の序跋の類も尽く掃済された。乾隆三四(一七六九)年六月丙辰の上諭(註13)では、彼の全集である初学集及び有学集の印本はおろか板本までも尽く燬出し片簡をも留むるを許さずと下令されている。彼の所論に清朝を誹謗するところが多いことがその理由とされているが、軽々に両朝に仕えた「武臣」として、人品低劣なる首惡として激しく非難(註14)され、以後百五十年清末にまでこの禁令は効力を有した。十七史についても、「兪將第九頁錢謙益序文鏤燬、余書聽其行世」(資送違碍書目 清乾隆末年江寧布政使刊)と謙益序抽燬の発令がなされた。従ってこの時期以後の印本は全て謙益の序文を欠く。只、この発令の精確なる年月日については未詳。なお、この乾隆期の印本とみられるものは謙益序のみならず、張能麟、侯于唐の序文をも欠くのを常とする。板木の損傷はさらに進み、後漢書志卷一の第五・六葉、北齊書卷二二

第七・八葉等に3〔康熙雍正間〕印本の後漢書目錄第七・八葉に見られたと同様の断板誤刷がある。また前掲蓬左文庫蔵本(1251)等で欠葉となっていた晋書卷一九第九・一〇葉が、原板に拠るかなり忠実な覆刻で補修されている。

宮内庁書陵部蔵 十七史三〇〇冊・弘簡録八〇冊・統弘簡録元史類編二〇冊(2871)

第一	一六冊	史記	一六冊	第一七	一四六冊	漢書	三〇冊
第四七	一六冊	後漢書	二〇冊	第六七	一七六冊	三國志	一〇冊
第七七	一〇六冊	晋書	三〇冊	第一〇七	一七六冊	宋書	二〇冊
第一二七	一三六冊	南齊書	一〇冊	第一四七	一四四冊	梁書	八冊
第一四五	一四八冊	陳書	四冊	第一九七	一七二冊	魏書	二四冊
第一七三	一七八冊	北齊書	六冊	第二一九	一八六冊	周書	八冊
第一八七	一七二冊	隋書	一六冊	第三〇三	一八八冊	南史	一六冊
第二一九	一四二冊	五代史	一〇冊	第三三二	一九〇冊	唐書	四八冊
第三九一	一三〇冊	五代史	一〇冊	第三〇一	一三八〇冊	弘簡録	八〇冊
第三八一	一四〇冊	統弘簡録元史類編	二〇冊				

宋書第九冊後表紙料紙に「華封字号」の牌号を存す。漢書・三國志・周書・北史等に和刻本・明南監本等との校合書入がみられる。「樽氏／蔵書」(朱方・漢書のみ)、「式部／寮印」(朱方)等の印記あり。

岩瀬文庫蔵 十七史二九四冊弘簡録・統弘簡録元史類編一〇一冊(531)

第一	一六冊	史記	一六冊	第一七	一四六冊	漢書	三〇冊
第四七	一六冊	後漢書	二〇冊	第六七	一七八冊	三國志	二〇冊
第七九	一〇二冊	晋書	二四冊	第一〇三	一七二冊	宋書	二〇冊
第一二一	一三二冊	南齊書	一〇冊	第一四三	一四〇冊	梁書	八冊
第一四一	一四四冊	陳書	四冊	第一四五	一六八冊	魏書	二四冊
第一六一	一七四冊	北齊書	六冊	第一七五	一八二冊	周書	八冊
第一八三	一八八冊	南史	一六冊	第一九一	二二二冊	北史	二四冊
第二三三	一三八冊	隋書	一六冊	第三九一	二八六冊	唐書	四八冊
第二八七	一九四冊	五代史	八冊				

外題は「(史名)幾」と墨書。三國志第一冊(首至卷二)は別

行通修零本を以って補配(書名のみの封面があり、上注表、卷一第一一六・二一・二二・二五・二八葉、卷二第一・二葉が改刻補修されている)。また晋書二四冊は別行十七史零本を以って補配(外題が他冊と異なり「十七史晋」と題署され、書型も相違)。三史に朱筆書入周密。朱・青筆の句点書入あり。

以下の諸帙は、これまで晋書或は陳書首に誤置されていた「晋書本伝」(陳寿伝)及び「節録宋書裴松之伝」を三國志首に改配す。

斯道文庫蔵 欠史記・漢書卷九九下・一〇〇、唐書配(元大徳九年建康路儒学)刊明南京国子監・清江寧府学通修本。

漢書三九冊	(09B) 54	・後漢書二四冊	(09B) 55	・三國志一六冊	(09B) 56	・晋書四〇冊	(09B) 57	・宋書三六冊	(09B) 58
南齊書一〇冊	(09B) 59	・梁書一〇冊	(09B) 510	・陳書四冊	(09B) 511	・魏書三〇冊	(09B) 512	・北齊書八冊	(09B) 513
周書八冊	(09B) 514	・南史二〇冊	(09B) 515	・北史四〇冊	(09B) 516	・隋書二〇冊	(09B) 517	・唐書四四冊	(09B) 518
五代史一〇冊	(09B) 519	・弘簡録八〇冊	(09B) 520	・統弘簡録元史類編二〇冊	(09B) 521				

安井息軒手沢本。晋書卷一三〇第五葉及び南史卷七九第六葉料紙に「汪星聚号本／槽選料加重」、弘簡録卷二三第二〇葉

料紙に「新安羅元／泰号功記」の朱牌号を存す。漢書・後漢書・晋書等一部に朱引・朱句点圈点並に息軒手書朱墨の校語等書入あり。「班竹山房／藏書記」(朱長方)の印記あり。

「班竹山房／藏書記」(朱長方)の印記あり。
蓬左文庫藏 十七史三〇〇冊(381)・弘簡録八〇冊(382)・続弘簡録元史類編(383)

各史分冊の次第は前記同文庫蔵本(1251)に同じ。尾崎良知旧蔵、「尾崎氏／藏書記」(朱長方)の印記あり。

東洋文庫藏 欠隋書卷七九―八五、十七史二九九冊(II 13)。

弘簡録八〇冊(II 4 26)・続弘簡録元史類編二〇冊(II 4 27)

第一	一六冊	史記	一六冊	第一七	一四六冊	漢書	三〇冊
第四七	一六冊	後漢書	二〇冊	第二七	一七六冊	三國志	二〇冊
第七七	一〇六冊	晋書	三〇冊	第三七	一四四冊	宋書	二〇冊
第二七	一三六冊	南齊書	一〇冊	第四九	一七二冊	梁書	八冊
第四五	一四八冊	陳書	四冊	第七一	一七八冊	魏書	二四冊
第一七	一七八冊	北齊書	六冊	第一〇二	一七六冊	南史	一六冊
第一八	一七二冊	隋書	一五冊	第二〇二	一七六冊	唐書	五〇冊
第二八	一四四冊	北史	二四冊	第二四二	一九一冊	唐書	五〇冊
第二九	二一九九冊	五代史	八冊				

史記及び漢書に封面があり、「琴川毛氏訂正／史記」(漢書は「前後漢書」)／汲古閣蔵板」と。一部朱点朱引、まれに返点送り仮名(唐書)の書入、また眉上に朱墨の校語等の書入がある。「聖護／院蔵／書記」(朱円)、「龍川／氏／図書／之記」(朱方)の印記あり。

封面に「汲古閣蔵板」とみえるが、この本の印行時なお汲古閣に板権があったか否か疑問である。印面汚損し他本と比較しても乾隆後期ないしは末期の印本とみなされる。康熙年間

には既に汲古閣の刻板は四散していたとも言われ(陶湘、明毛氏汲古閣刻書目錄)、この封面は坊間書肆の偽製であろう。

東京大学総合図書館蔵 欠後漢書・三國志・唐書 史記二〇冊

(G30 100)・漢書三〇冊(G30 90)・晋書三〇冊合一〇冊(G30 99)・

宋書二〇冊合七冊(G30 101)・南齊書一〇冊合三冊(G30 51)・梁

書八冊合三冊(G30 103)・陳書四冊合一冊(G30 39)・魏書三〇冊

合一〇冊(G30 89)・北齊書六冊合二冊(G30 41)・周書八冊合二

冊(G30 27)・隋書二〇冊合六冊(G30 102)・南史二〇冊合六冊

(G30 98)・北史二四冊合九冊(G30 84)・五代史八冊合二冊(G30

46)・弘簡録六四冊合二〇冊(G30 83)・続弘簡録元史類編一

六冊合六冊(G30 31)

各史とも総目・刊記の一葉を欠き、わずかながら補写葉あり。

北史卷三〇第一〇葉裏に「怡興／加重」の朱牌号を存す。「青洲文庫」(朱長方・渡辺青洲)の印記あり。

刈谷市立刈谷図書館蔵 漢書二二冊(319)・後漢書一八冊(320)

村上忠順自筆書入本

朱句点が施され、行間、眉上或は料紙余白、更には附簽に朱

墨筆で胡三省、劉放等諸家よりの引抄、明南監本等諸本との

校合がなされ広範詳密なる書入がある。

岩瀬文庫蔵 後漢書(欠首―卷二三)一八冊(4240)・梁書一〇

冊(423)

後漢書卷五四―五六は重複。「読書室／珍藏記」(朱長方)の

印記あり。

東京大学総合図書館蔵 三國志二二冊合四冊(G30 508)

東京大学総合図書館蔵 三國志二二冊合四冊(G30 508)

総目・刊記の一葉及び上注表を欠く。「桑名」(朱円)、「楽亭文庫」(朱長方)、「立教館／図書印」(朱長方)、「青洲文庫」(朱長方)の印記あり。松平定信、渡辺青洲通蔵。

神宮文庫蔵 三國志二冊(五乙二ろ194)

朱句点、校字書入。「宮崎／文庫」(朱方)、「神宮／文庫」(朱方)の印記あり。

同蔵 晋書二四冊(五乙二ろ194)

東京大学総合図書館蔵 陳書四冊合一冊(G30723) 長基連寄贈本

大阪大学附属図書館蔵 陳書四冊(懷徳堂)

同蔵 周書八冊(懷徳堂)

5 [至乾隆末] 通修本

乾隆後期の印本になると板木の破損摩滅が更に進み、特に漫漶の激しい史記・漢書・三國志・北齊書の総目・刊記葉が改刻補修される。殊にこの補修の結果、三國志に甚だしい誤脱が生じている。総目の原板は「陳寿三國志凡六十五篇總六十五卷／魏志三十卷／(以下低)蜀志一十五卷／吳志二十卷／(以下低)裴松之註」とあるが、第一行の「凡六十五篇」の五字、及び第三行の「一」字を脱し、第二・四行の「志」を「書」に改め、未行の「裴松之」を「裴駟」に誤る。更に総目裏葉の刊記(271頁参照)には「有」「如」「花朝」の四字の脱落がみられる。また漢書の総目葉の原板は「班固前漢書凡百篇總一百二十卷／(以下低)十二帝紀一十三卷／八表一十卷／十志一十八卷／七十列伝七十九卷／(以下低)顔師古注」とあるが未行の「顔師古注」の四字が欠落し裏葉の刊記がない。此の葉は他の葉に比し漫漶が著しく

改刻後相当の期間を経ていよう。尚、この時期以降の印本は魏書の総目・刊記葉欠落。

一〇〇冊(20534)

宮内庁書陵部蔵 十七史三〇〇冊 弘簡録・統弘簡録元史類編

第一	一六冊	史記	一六冊	第一七	一四六冊	漢書	三〇冊
第四七	一〇八冊	後漢書	二〇冊	第六七	一七八冊	三國志	二〇冊
第七九	一〇八冊	晋書	三〇冊	第一〇九	一七八冊	宋書	二〇冊
第一二九	一三六冊	南齊書	八冊	第一三七	一四四冊	梁書	八冊
第一四九	一四八冊	陳書	四冊	第一四九	一七六冊	魏書	二四冊
第一七三	一七九冊	北齊書	七冊	第一八〇	一七八冊	周書	七冊
第一八七	二〇二冊	隋書	一六冊	第二〇三	一七八冊	南史	一六冊
第二一九	二四二冊	北史	二四冊	第二四三	一九二冊	唐書	五〇冊
第二九三	三〇〇冊	五代史	八冊	第三〇一	一三八〇冊	弘簡録	八〇冊
第三八一	四〇〇冊	統弘簡録元史類編	二〇冊				

弘簡録卷一三六第二一葉料紙に「新安羅元／泰号志記」の朱牌号を存す。ほぼ全篇に亘り朱墨青筆の句点圈点が施され、眉上或は行間に朱墨両筆の校語等の書入がある。「古賀氏／藏書章」(朱長方)の印記あり。

以下の諸帙は漢書の総目・刊記を再度改刻し誤脱を正す。

内閣文庫蔵 十七史二九五冊(2821) 弘簡録・統弘簡録元史類編一〇〇冊(28686)

第一	一九冊	史記	一九冊	第二〇	一四九冊	漢書	三〇冊
第五〇	一六九冊	後漢書	二〇冊	第七〇	一八一冊	三國志	二〇冊
第八二	一八一冊	晋書	三〇冊	第一〇一	一三一冊	宋書	二〇冊
第一二二	一三九冊	南齊書	八冊	第一四〇	一四七冊	梁書	八冊
第一三八	一五一冊	陳書	四冊	第一五二	一七一冊	魏書	二〇冊
第一七二	一七七冊	北齊書	六冊	第一七八	一八三冊	周書	六冊
第一八四	一九九冊	南史	一六冊	第二〇〇	二二三冊	北史	二四冊
第二三四	二三九冊	隋書	一六冊	第二四〇	二八七冊	唐書	四八冊
第二八八	二九五冊	五代史	八冊				
		統弘簡録元史類編	二〇冊				

後漢書の総目・刊記葉を欠く。弘簡録・統弘簡録元史類編は

別に配架されているが、装訂、外題、印記等からみて元來は一揃の本である。周書卷二第七葉料紙に「永大字号本／廠精選監製」、隋書卷七第六第一四葉料紙に「春和／本廠・春和」の朱牌号を存す。史記・晉書・宋書・南史・唐書には一部眉上等に墨書兩筆の校語等の書入がある。「元老院／圖書記」(朱長方)、「日本／政府／圖書」(朱方)の印記。

東京大学東洋文化研究所蔵 十七史二九八冊 (部類 史正)・弘簡録

八〇冊 (部類 史別 19)・続弘簡録元史類編二〇冊 (部類 史別 20)

- | | | | | | | | |
|-----|------|-----|-----|-----|-------|-----|-----|
| 第一 | 一六冊 | 史記 | 一六冊 | 第七七 | 一四四冊 | 漢書 | 二八冊 |
| 第四五 | 一〇六冊 | 後漢書 | 三〇冊 | 第六五 | 一七六冊 | 三國志 | 二〇冊 |
| 第七七 | 一〇六冊 | 晉書 | 三〇冊 | 第七〇 | 一七六冊 | 宋書 | 二〇冊 |
| 第七七 | 一〇六冊 | 南齊書 | 八冊 | 第三五 | 一四二冊 | 梁書 | 八冊 |
| 第四三 | 一四六冊 | 陳書 | 四冊 | 第七七 | 一七二冊 | 魏書 | 二六冊 |
| 第七三 | 一七八冊 | 北齊書 | 六冊 | 第七九 | 一八四冊 | 周書 | 二六冊 |
| 第八五 | 一〇〇冊 | 南史 | 一六冊 | 第一〇 | 一三四冊 | 北史 | 二四冊 |
| 第二五 | 一四〇冊 | 隋書 | 一六冊 | 第二四 | 一一九〇冊 | 唐書 | 五〇冊 |
| 第二九 | 一四八冊 | 五代史 | 八冊 | | | | |

大木文庫。史記首六卷(第一冊)は配影鈔、首に張能麟・侯于唐兩序あり。晉書卷四七第四葉・南齊書卷八第三葉・魏書卷一六上第五葉・唐書卷七三下第一葉等の料紙に前記内閣文庫本と同様の「春和／本廠・春和」、三國志卷一八第一三葉・南史卷三三第三葉に「祥／順・文記本廠／督造選料／各色名紙」の朱牌号を存す。一部眉上或は附簽に校語等の書入あり。

内閣文庫蔵 十七史二四〇冊 (282)

- | | | | | | | | |
|------|------|-----|-----|-----|-------|-----|-----|
| 第一 | 一二冊 | 史記 | 一二冊 | 第一三 | 一三六冊 | 漢書 | 二四冊 |
| 第三七 | 一五六冊 | 後漢書 | 二〇冊 | 第五七 | 一六六冊 | 三國志 | 一〇冊 |
| 第七七 | 一〇六冊 | 晉書 | 二四冊 | 第九一 | 一〇六冊 | 宋書 | 一六冊 |
| 第七七 | 一〇六冊 | 南齊書 | 六冊 | 第一三 | 一八八冊 | 梁書 | 六冊 |
| 第一九 | 一二二冊 | 陳書 | 三冊 | 第二二 | 一四四冊 | 魏書 | 二〇冊 |
| 第一四二 | 一四五冊 | 北齊書 | 四冊 | 第四六 | 一一五〇冊 | 周書 | 五冊 |

- | | | | | | | | |
|-----|-------|-----|-----|-----|--------|----|-----|
| 第一五 | 一六二冊 | 南史 | 一二冊 | 第一六 | 三一八二冊 | 北史 | 二〇冊 |
| 第一八 | 三一九四冊 | 隋書 | 一二冊 | 第一九 | 五一一三四冊 | 唐書 | 四〇冊 |
| 第三五 | 一四〇冊 | 五代史 | 六冊 | | | | |

弘簡録・続弘簡録元史類編無し。昌平坂學問所本。梁書卷五第一・一二葉、卷四七第六・八葉に上述の後漢書目錄第七・八葉と同様の断板誤刷がみられる。北史の総目・刊記葉を南史卷末に誤綴。「昌平坂／學問所」(朱長方)、「淺草文庫」(朱長方)、「日本／政府／圖書」(朱方)の印記あり。

東京都立中央図書館蔵 十七史三二〇冊 (221W4)

- | | | | | | | | |
|-----|------|-----|-----|-----|------|-----|-----|
| 第一 | 一〇冊 | 史記 | 二〇冊 | 第二二 | 一五〇冊 | 漢書 | 三〇冊 |
| 第五 | 一七〇冊 | 後漢書 | 二〇冊 | 第七 | 一八二冊 | 三國志 | 二〇冊 |
| 第八 | 一三二冊 | 晉書 | 三〇冊 | 第一三 | 一三三冊 | 宋書 | 二〇冊 |
| 第一四 | 一四二冊 | 南齊書 | 一〇冊 | 第一四 | 一三二冊 | 梁書 | 八冊 |
| 第一五 | 一四四冊 | 陳書 | 四冊 | 第一五 | 一四四冊 | 魏書 | 三〇冊 |
| 第一八 | 一五〇冊 | 北齊書 | 六冊 | 第一九 | 一三八冊 | 南史 | 二〇冊 |
| 第二二 | 一三二冊 | 五代史 | 八冊 | 第二六 | 一三二冊 | 唐書 | 五〇冊 |

弘簡録・続弘簡録元史類編無し。市村文庫。唐書・魏書のほか、梁書・陳書・周書の総目・刊記葉を欠く。南齊書・隋書の総目・刊記葉はそれぞれ陳書・南史の卷一末に誤綴、北史卷五四首葉料紙に前記内閣文庫本(282)と同様の「永大字号／廠精選監製」の朱牌号を存す。

6 [清嘉慶間]常熟席氏掃葉山房宋遼金元別史附印本
さらに後出の印本になると弘簡録・続弘簡録元史類編に替え「宋遼金元別史」と題して常熟席氏掃葉山房校刊の次の五書が附印される。

- 東都事略一三〇卷 宋王偁撰 清席世臣校 清乾隆六〇(一七九五)年序刊

南宋書六八卷 明錢士升撰 許重熙贊 清席世臣校 清嘉慶

二(一七九七)年刊

契丹國志二七卷首目一卷 宋葉隆札撰 清席世臣校 清嘉慶

二(一七九七)年刊

大金國志四〇卷首目一卷 宋宇文懋昭撰 清席世臣校 清嘉

慶二(一七九七)年刊

元史類編四二卷首目一卷附圖考 清邵遠平撰 清席世臣校

清乾隆六〇(一七九五)年刊

東都事略首に「東都事略 南宋書 契丹國志／大金國志 元

史類編／宋遼金元別史(大字)／掃葉山房藏板」の封面があり、

この五書は当初は単行書として発刊されたであろうが、嘉慶二

(一七九七)年以降、「宋遼金元別史」として十七史に合編附印

されて通行した。^(注15) 嘉慶三(一七九八)年謝啓昆の「宋遼金元別

史序」(嘉慶三年仲春之月／欽命浙江承宣布政使司布政／使前

／日講起居注官翰林院編修南／康謝啓昆序)、初印本には不載、

静嘉堂文庫本等後印本にみえる)に、

常熟席君世臣、博聞好古、藏書尤富。嘗因其友錢梅谿泳索余

西魏書曰、將以翼正史也。予甚愧其意。一日、以所刻宋遼金

元五書來質於予。東都事略・南宋書者宋別史也。契丹・大金

兩國志者遼・金之別史也。元史類編者元別史也。其為書或先

正史、或在史後。要其詳贍典則足与正史補苴參証則一也。予

以此歎席君之能識其大矣。近代刻書家、毛氏最盛、以經史有

功、於藝林甚鉅。今毛氏十七史板、席君既購藏之。又将広稼

別史開雕、為諸正史之附庸。吾知掃葉山房之名、与汲古閣並

壽於世甚、為席君期之^(句読者)

とあり、五書刊行の事情が知れるとともに、汲古閣十七史の刻板が嘉慶初年には已に席氏掃葉山房に帰していたことが明らかである。^(注16)

校刊者席世臣については、嘉慶三(一七九八)年阮元の「宋

遼金元別史序」に、「席君元丙午同年友也。家多藏書。復厲元

鈔錄浙江文瀾閣諸秘籍。挾經史子集之佳者、將以次第付梓。洵

有裨於儒林之觀覽也」^(句読点)とみえるが詳伝未詳。恐らくは

清初常熟の藏書家席鑑の後裔であろう。鑑については常昭合志

稿卷三二人物志、藏書紀事詩卷四等に見え、古書の刊行も行

い、その刊本には版心に「掃葉山房」と題すと。掃葉山房は莫

友芝^{(字は子德、貴州独山人、清嘉慶一六(一八一七)年歿)}によると「嘉道來蘇城

書肆」^(即亭知見伝本書目卷四)と。王漢章「刊印總述」(中國

近代出版史料二編 上海 群聯出版社 一九五四年)張靜廬注

所引の葉九如の言に拠ると、掃葉山房の出版は明万曆年間に遡

り、松江の席氏が毛氏汲古閣正史等の書板を購得して後、蘇州

の洪、謝、陸三氏と共に合資し松江に掃葉山房を開設した。ほ

どなく蘇州閶門内に移設され、同治年間には上海彩衣街に分店

を、東唐家弄に木版印刷所を設けたものという。九如の所述に

はやや曖昧なところもあるが、松江席氏とは恐らくは席世臣に

あたり、世臣所營の掃葉山房は民国初年、盛んに密行細字の石

印本を刊行したことで知られる上海掃葉山房の祖体とみてさし

つかえないであろう。

宮内庁書陵部藏 十七史(欠唐書卷一四七―一五〇)三四〇冊・

宋遼金元別史六〇冊全四〇〇冊 (267 18)

第一	二〇冊	史記	二〇冊	第二	一	五〇冊	漢書	三〇冊
第一	一	七四冊	後漢書	四四冊	第七	一	八六冊	三國志
第八	七	一一六冊	晉書	三〇冊	第一	一	一七〇冊	宋書
第九	一	一五〇冊	南齊書	一〇冊	第一	一	一六〇冊	梁書
第十	一	一六六冊	陳書	六冊	第一	一	一九〇冊	魏書
第十一	一	二〇〇冊	北齊書	六冊	第二	一	二〇〇冊	周書
第十二	一	一三〇冊	隋書	二〇冊	第三	一	一五〇冊	南史
第十三	一	一八〇冊	北史	三〇冊	第四	一	一三三冊	唐書
第十四	一	一四〇冊	五代史	一〇冊	第五	一	一三七冊	東都事略
第十五	一	一三七冊	南宋書	一五冊	第六	一	一三五冊	契丹國志
第十六	一	一三八冊	大金國志	五冊	第七	一	一四〇冊	元史類編

同目錄には「二十一史」として著録。首に「汲古閣毛氏刊本

／十七史」の封面がある。後出印本には封面左区画に「附宋

遼金元」とあるが、この本にはない。同板とみとめられ、後出

本は入木による控改か。唐書卷二二五下第一葉に「元有本

廠」の朱牌号を存す。「桐亭／函書」(朱方)、「帝室／函書」

(朱方)の印記あり。

7 掃葉山房通修本

掃葉山房では刻板購求して後、數次に亘り断板爛板の補修を重ねながら、恐らくは嘉慶道光年間を通して印行を続けている。以下の諸本はその通修本で漫漶葉が夥しく繙読に堪えない部分が多い。「汲古閣毛氏刊本／十七史／附宋遼金元」の封面を有し、東都事略首に前掲本と同板の封面があるが、「宋遼金元四史」と題し、「別」字を「四」と改刻している。

- 神宮文庫蔵 欠陳書 史記一二冊 (五七二) 漢書二四冊 (同 183) ・後漢書二〇冊 (182) ・三國志一〇冊 (195) ・晉書二四冊 (194) ・宋書二六冊 (192) ・南齊書八冊 (192) ・梁書六冊 (201) ・魏書一九冊 (187) ・北齊書六冊 (203) ・周書五冊 (192) ・

隋書一二冊 (194) ・南史一二冊 (188) ・北史二四冊 (199) ・唐書卷五六・六二配明南京國子監刊至清康熙三十九年通修本四九冊 (197) ・五代史六冊 (191) ・東都事略一二冊 (193) ・南宋書一〇冊 (194) ・契丹國志二冊 (187) ・大金國志四冊 (194) ・元史類編一六冊 (181) 新たな補刻の個所は次の各葉である。書名下に漢數字で巻数を、一で結び張数を示す。

漢書 八三―12・13の上半部分、九九下―19・20

三國志 六五―11・12の上部二字部分

南齊書 二九―1・2

梁書 二〇―1・7、五六―22

周書 三一―1 (同卷第二張は補写、更に後出の印本はこの葉も補刻)

北史 六五―1、六六―5・14、九四―1・22、九六―1

唐書 八一―1・4、八三―1・2、九五―1・2下方四

分の一部分、二二五下―13・14

「林崎文庫」(朱長方)、「桜山文庫」(朱円)の印記あり。

東京大学総合図書館蔵 欠宋書・梁書・北齊書・隋書・南史・

北史・唐書・元史類編 史記一二冊合二冊 (G30 626) ・漢書二

四冊合四冊 (G30 625) ・後漢書二〇冊合三冊 (G30 628) ・三國志一

〇冊 (G30 600) ・晉書二四冊合六冊 (G30 613) ・南齊書六冊合二冊

(G30 615) ・陳書三冊合一冊 (G30 636) ・魏書二〇冊合五冊 (G30 614) ・

周書五冊合一冊 (G30 687) ・五代史六冊合二冊 (G30 643) ・東都事

略一六冊合四冊 (G30 634) ・南宋書一六冊合三冊 (G30 612) ・契丹

國志三冊合一冊 (アジア資料室 史7) ・大金國史五冊合一冊

(同史5)

次の各葉が新たに補刻され前掲神宮文庫本より、やや後の印行とみなされる。

後漢書 目錄―5、10、12、一―15、二―1・2

陳書 三六―1・2の上三分の一部分

「克明館／文庫印」(緑長方)、「克明館藏書」(緑横長方)、「振衣閣」(朱長円)の印記あり。

以下はさらに後出の印本で、従前より欠葉であった張能鱗「十七史序」が覆刻補入されている。

内閣文庫蔵 欠三国志・五代史・大金国志、史記二二冊(279

10)・漢書二四冊(320 5)・後漢書^{欠志三〇卷}二〇冊(279 64)・晋書

二四冊(280 24)・宋書一六冊(320 25)・南齊書^{欠卷五九卷}六冊(380 39)・

梁書六冊(280 46)・陳書三冊(280 50)・魏書二〇冊(280 59)・

北齊書四冊(280 60)・周書五冊(320 21)・隋書一二冊(320 23)・

南史一二冊(320 27)・北史二四冊(320 31)・唐書四〇冊(281 5)・

東都事略二〇冊(286 7)・南宋書一四冊(286 57)・契丹国志二

冊(286 10)・元史類編二〇冊(286 87)

安政丁巳(四年一八五七)新取昌平坂学問所旧蔵本。新たに補刻された個処は、

張能鱗「十七史序」、縁起―1

漢書 目錄―1・2、一上―1、4、一―1・2、七八

―9・10

後漢書 総目刊記葉、目錄―1・2、一上―1、8、一―下

―14、二―9、12、三―6・7・11・12、四―13・14、

五―3、8、九―5、一―1・2、二―1・2、二

六―1・2、二八上―7、二八下―1・2、二九―1・

2、三〇上―1・2、三七―3・4、四―1・2、六

七―1・2、七六―1・2、八〇下―11、八―1・2、八

三―3、8、八四―5・6、八七―1・2

梁書 四七―3・4

魏書 一〇二―9・10

周書 三一―2

南史 八〇―21・22

宋書卷七九第九葉、南齊書卷九第二五葉並に陳書卷三〇第六葉料紙に「仁泰／本廠・琪」、南史卷四四末葉料紙に「仁泰／本廠・瑞」の朱牌号を存す。「昌平坂／学問所」(墨長方)、「安政丁巳」、「浅草文庫」(朱長方)の印記あり。

同蔵 史記一六冊(279 5)

総目・刊記葉欠落。四七―3・4は新雕補刻。「黒川氏／圖書記」(朱長方)、「大日本／帝國／圖書印」(朱方)の印記あり。

同蔵 欠・北齊書・契丹国志・元史類編、史記一六冊(279 9)・

漢書二四冊(279 57)・後漢書二〇冊(279 68)・三国志一〇冊

(280 12)・晋書二六冊(320 10)・宋書二〇冊(280 32)・南齊書八

冊(280 37)・梁書六冊(280 47)・陳書三冊(320 16)・魏書三〇

冊(280 53)・周書五冊(280 63)・隋書一六冊(280 69)・南史一

二冊(280 78)・北史二四冊(320 30)・唐書四〇冊(281 8)・五

代史六冊(320-36)・東都事略一六冊(286-1)・南宋書一〇冊(286-56)・大金國志四冊(286-11)

明治一二年内務省図書局購求本。新たに加修された個処は、

漢書 一〇〇上―13・14

後漢書 志三〇―8・9

三國志 上注表、晉書本伝、一―11・6・21・22・25・28、

二―1・2、三―1・2、四―5・6(附句点)、五―11・

4、八―7・8、一―5・6、一五―1・2、一八―

1・2、一九―11・4、三五―1・2、三八―5・6、

五二―7・8、五三―1・2(附句点)、五六―1・2(附句点)

五八―3・8、六一―5・6、六四―1・2、六五―

11・12

晉書 二七―9・10、四八―11・4、五四―1・2、一〇

三―17、一一四―3・12、一二〇―7・8、一二三―

1・2、一二七―1・2

梁書 二二―2・13、五六―3・22(22は再度改刻)

魏書 三―5・6、九一―1・2

周書 四二―5・12

南史 七〇―17・20

唐書 九五―3・6、一四三―1・2、一八二―1・4、

一九〇―5、二一五上―19・20、二一五下―1、二一六

下―1・4、二二五下―13・14(再度改刻)

史記卷四二第七丁及び北史卷五五第一丁料紙に前掲同文庫藏南史(320-27)と同様の「仁泰/本廠・瑞」の朱牌号を存す。

「明治十二年購求」(朱長方)、「大日本/帝国/図書印」(朱方)、「農商/務省/図書」(朱方、消印)、「大政官/文庫」(朱方)、「殿春/館記」(朱方)の印記あり。

静嘉堂文庫蔵 十七史附旧五代史・宋遼金元四史・明史四二二冊(甲六)

冊(甲六)

第一―一四冊 史記 一四冊 第一五―一三八冊 漢書 二四冊

第三九―一五八冊 後漢書 二〇冊 第五九―一七〇冊 三國志 二冊

第七―一〇九冊 晉書 二六冊 第九七―一二二冊 宋書 一六冊

第一三―一二〇冊 南齊書 八冊 第二二―一二八冊 梁書 一八冊

第二九―一三三冊 陳書 四冊 第三三―一五〇冊 魏書 一八冊

第一五―一五四冊 北齊書 四冊 第五五―一六〇冊 周書 一六冊

第一六―一七四冊 隋書 一四冊 第七五―一八八冊 南史 一四冊

第八九―一二二冊 北史 二四冊 第一三―一五二冊 唐書 四〇冊

第二五―一五八冊 五代史 六冊 第五九―一二四冊 旧五代史 二冊

第七五―一二八冊 東都事略 三冊 第八五―一二九冊 南宋書 八冊

第九九―一二九冊 契丹國志 二冊 第九五―一二八冊 大金國志 四冊

第二九―一三〇冊 元史類編 三冊 第三一―一四三冊 明史 一一二冊

席氏掃葉山房校刊の「宋遼金元四史」に加え同じく掃葉山房

嘉慶元年刊の「旧五代史」及び「明史」を附し一括一揃とな

っている。管見の及んだ限りでは、本帙が汲古閣刊十七史の

合刊本としては最も後出のものであり、補刻改修の個所が更

に増加している。新たに補刻された部分を次に掲げる。

史記 九―7・8

漢書 七八―7・8、九七上―17・20

後漢書 目錄15・18、三―1・4・9・10、五―1

晉書 二七―9・10、四八―11・4、一一四―3・12、一

二〇―7・8(以上再度改刻)、一三〇―10

宋書 八八―1・2

梁書 二二―1、三二―1・2、四八―1・2・5・8

魏書 総目刊記葉、一〇七下―19・20

北齊書 三―5・6、四―14、四〇―1、四四―3・4、

四五―1・2、四八―1・2

周書 四〇―7、四一―8、五〇―9・10

南史 三七―1・2、六四―11・12、六五―1・2、七一

―3・4

北史 九八―1・2・7・8

唐書 七四上―1、七五上―1・2、七八―1・2、八〇

―1・2・14、八二―1・2、八八―1、九九―7、10

一〇八―1・2、一一〇―1・2、一一一―1・2、一

一三―1・2、一二二―19、一四七―1・2、一六九―

9、一七〇―1・2、一七一―3・4、一七六―1・2

一八八―13、一九〇―1・2・9、二一五下―2、二一

六下―9・10、二二五下―13・14 (再度改刻)

〔福山／文庫〕(朱方)の印記あり。

同蔵 晉書二四冊(4037)

竹添井々旧蔵。前掲本よりも更に後出の本で、新たに加修されたところは、

三―16、八―11・12、二〇―19、三三―2、5、三五―5

三八―2、五二―3、五五―18、八三―6、八六―9・15

九一―7、九五―25、九八―7、一〇一―3、一一一―7

一三―3 (再度改刻)、一一九―2・3、一二九―8

全帙に亘り朱句点圈点朱引が施され、行間及び眉上に朱の校語書入がある。一部に墨筆で玉篇等に依る音義注を標記。処

々に次の丁巳年(安政四年カ)より明治六年に亘る校読識語がある。

丁巳五月廿七日 龍門学人信猷(卷三六末)

丁巳五月廿八日加朱了 龍門学士(卷三七末)

丁巳閏五月朔一見 龍門学人猷(卷四〇末)

丁巳閏五月朔一見了 龍門学士(卷四一)

丁巳閏月二日夜一閱 龍門学士猷(卷四二末)

丁巳閏月四日夜一見 龍門学士猷(卷四三末)

丁巳閏月五日加朱了 龍門学士(卷四四末)

文久紀元歳次辛酉秋八月据伝経廬手校本校正畢／并一読了

桂舟藤安利識(卷六九末)

文久二歳次庚戌(壬戌の誤)仲春初七校正一過 安利(印)

(卷七五末)

壬戌晚夏旬日据竹逕師手沢本校正一完安利識(卷九二末)

元治元甲子八月管祀日点読(卷三末)

甲子冬九月句読一過利識(卷九末)

甲子十月校了藤利識(卷一二末)

慶應三歳次丁卯清秋念二於間徴葺室／拠于海保竹逕手校本

校正畢併加圓点 安利識(卷三七末)

慶應三歳次丁卯桂月念四日於間徴葺室拠于伝経廬手沢本／

校正一過時秋霖蕭々殆読書之好時節也桂舟藤安利識(卷

四二末)

慶應三歳在丁卯秋西瀨念陸於間徴葺室拠于伝経廬手校本校

／正一過并与管夏繁君橋隆庵君依于明万歴版嘉瑞版対読

了藤安利仁卿氏（卷四七末）

慶應三歲次丁卯秋八月晦据于伝経廬手校本以加句逗桂舟藤安利（卷五二末）

慶應三歲在丁卯晚秋初三於長者街間徵書屋据明方曆及嘉靖刻本校合／以朱筆加同異其上下方且点於句逗了 桂舟藤安利識（卷五八末）

明治五年申歲晚秋／念八於間徵齋以朱筆安利一読（卷一八末）

明治六酉年二月旬六読過 桂舟藤利識（卷二七）

明治六癸酉年二月以朱毫点読了桂舟藤安利識（卷三一末）

明治六癸酉年三月旬有肆日於間徵齋以朱毫一読畢安利識（卷九九末）

明治六癸酉年三月念五日以朱筆点読畢 桂舟藤利（卷一〇五末）

明治六年四月十一日^{???}以朱毫於間徵齋一読了安利（卷一一三末）

明治六年五月旬一於間徵齋一読畢藤利記（卷一二一末）

明治六酉年仲夏念肆於間徵齋以朱毫点読訖安利識（卷一三〇末）

「青山氏／藏書印」（朱長方）、「松方／文庫」（朱方）の印記。

○覆刻並翻刻本 所謂汲古閣本十七史

8 古呉書業趙氏覆汲古閣刊本

邵亭知見伝本書目卷四に「翻刻汲古閣十七史有書業堂及掃葉

山房二本、以書業趙氏本為勝」とみえ、早くより書業堂刊本の存在することは知られていたが、従来藏書目録の大半が精確な記述を欠く為もあって、その所在を確認報告された例を見ない。我國の見存本も僅少で、管見の限りでは次の二本を確め得たに止まる。書業堂の名は書林清話卷九呉門書坊之盛衰にも「闔門書業堂」と見え、「時闔門書業堂、新翻汲古閣十三經」と付注がある。莫友芝は「嘉道來蘇城書肆」と。

国会図書館蔵 史記一二冊合六冊（15213）・漢書二四冊合一二冊（16934）・後漢書一六冊合八冊（16038）・三國志八冊合四冊

（15214）・晉書二四冊合一二冊（17831）・宋書一二冊合六冊（16938）・南齊書六冊合三冊（16932）・梁書六冊合三冊（16860）・

陳書三冊合一冊（16859）・魏書二〇冊合一〇冊（17622）・北齊書四冊合二冊（16936）・周書五冊合二冊（16858）・隋書一二冊

合六冊（1474）・南史二二冊合六冊（16947）・北史二〇冊合一〇冊（15212）・唐書三二冊合一六冊（17842）・五代史八冊合三冊（17841）・旧五代史^(注17)一六冊合八冊（17840）・弘簡錄六四冊合

三〇冊（17839）・統弘簡錄元史類編一六冊合八冊（17218）・明^(注18)史九六冊合四八冊（17553）

薄茶色表紙（二七・七×二七・五種）。「帝国図書館」と空押のある肌色厚表紙でほぼ二冊を一冊に合綴。各冊元表紙右肩に

「二十一史／合四百十六冊」と墨書された小紙片を貼付。封面

面「汲古閣十／七史^{附宋遼金元宏簡錄}」と、各史首には書名のみ封面

或は書扉を有す。首に張能麟、侯于唐の二序があるが錢謙益

の序はない。以下「重鐫十三經十七史緣起」、史記総目・刊記、

「史記目錄」と続く。十七史各史の巻頭題署程式、版式行款は汲古閣刊本に倣うが、しばしば尾題を欠き、巻首の小木記が墨釘のままにされている等手抜ききの個所が目につく。左右双辺（二一×一四・五種）。「史記目錄」首行下方に「古吳書業／趙氏重鐫」の小木記があり、この木記は両漢書・宋書を除く各史の巻頭題或は尾題下にも散見する。原刻の「琴川毛鳳苞／氏審定宋本」の小木記は往々省刻されたまた史記卷一九・南齊書卷三・四・五一巻首等両木記を並び刻するところもある。附印の弘簡錄及び続弘簡錄元史類編は康熙中繼善堂刊通修本で、瀾板が多く所々補修改刻の葉があり、その印行は「弘」字を欠筆する前掲5乾隆印本より相当下るものと認められる。両書の刻板は恐らくは嘉慶頃、繼善堂より趙氏に移り、新雕の十七史に付印されたものであろう。旧五代史（覆席氏掃葉山房校刊本）・明史については印行当初から合印されたものであるか否かは明らかでない。「平城明教館／蔵書印」（朱長方）の印記あり。

大阪府立中之島図書館蔵 欠三国志 史記大二〇冊（32・31）・漢書三〇冊（34・10）・後漢書二〇冊（34・16）・晋書三二冊（33・30）・宋書一八冊（34・32）・南齊書一〇冊（34・38）・梁書八冊（34・42）・陳書四冊（34・46）・魏書二四冊（34・50）・北齊書六冊（34・50）・周書八冊（34・58）・隋書二〇冊（34・118）・南史二〇冊（34・60）・北史二四冊（34・66）・唐書四〇冊（34・100）・五代史八冊（35・12）・旧五代史一六冊（35・18）

9 [清] 刊両漢書

東京大学総合図書館蔵 漢書二四冊（G30・57）・後漢書二四冊（G30・58）

薄茶色表紙（二四・六×一六・二種）。双辺元題簽「漢書（後漢書）」を存す。封面「琴川毛氏訂正／前後漢書／汲古閣蔵板」と。首目以下巻頭題署程式、版式行款は並に汲古閣刊本に倣う。辺欄内辺縦二一・二種、横一四・八種。ただ各巻首末の版心題を「汲古閣上毛氏正本」「汲古閣毛氏正本前漢幾」等とし後漢書各巻末に「琴川毛鳳苞／氏審定宋本」の小木記が無いなどの小異がある。料紙に「羅亦云号」の朱牌号を存す。刊時は明確にし難いが、弘・寧字等清辨を避けていないところから或は康熙雍正頃の刊本か。封面に「汲古閣蔵板」とあるが、汲古閣刊本とは全葉明らかに異板で、字様も不整齐である。一部朱青筆の句点書入あり。「青州文庫」（朱長方）の印記。

10 局刻二十四史

同治三（一八六四）年七月、両江総督曾國藩は江寧を陥し太平天国を滅すと市街荒廃し経籍の蕩然たるをうれえ、江寧鉄作坊に（同治七（一八六八）年治城山飛雲閣に移設）金陵書局（後江南官書局、国学書局と称す）を、揚州に淮南書局を開設した。以後各省官署に相繼いで書局が開かれる。浙江杭州の浙江書局（同治六（一八六七）年、馬端敏開局、武林蔵書録書上に見ゆ）、江蘇蘇州の江蘇書局、湖北武昌の崇文書局、湖南長沙の思賢書局、山東濟南の山東書局、広東広州の広雅書局、江西南昌の江西書局、四川成都の存古書局等で、その刊行書は

局本或は書局板と言われ、校勘の精審なことで定評があった。そのうち金陵書局、淮南書局、浙江書局、崇文書局、江蘇書局の五書局により同治八（一八六九）年から光緒四（一八七八）年にかけて二十四史が刊行された。金陵書局は史記・漢書・後漢書・三國志・晉書・宋書・南齊書・梁書・陳書・魏書・北齊書・周書・南史・北史を、淮南書局が隋書を、浙江書局が旧唐書・唐書・宋史を、崇文書局が旧五代史・五代史・明史を、江蘇書局が遼史・遼史拾遺・金史・元史をそれぞれ担当校刊している。この二十四史のうち十七史は汲古閣刊本に拠って翻刻され、清末以降、武英殿版系統の諸翻刻影印本と共に通行流布したものである。

各史首に書名のみを刻した書扉がありその裏に次の木記を有す。

- 史記 「光緒四年冬日／金陵書局印行」
 漢書 「同治八年九月／金陵書局刊」
 後漢書 「同治八年九月／金陵書局校刊」
 三國志 「同治九年五月／金陵書局印行」
 晉書 「同治十年十一月／金陵書局印行」
 宋書 「同治十一年冬十／月金陵書局印行」
 南齊書 「同治十三年冬／金陵書局印行」
 梁書 「同治十三年冬／金陵書局印行」
 陳書 「同治十三年冬十／月金陵書局印行」
 魏書 「同治十三年冬十／月金陵書局印行」
 北齊書 「同治十三年冬／金陵書局印行」

- 周書 「同治十三年冬／金陵書局印行」
 隋書 「同治辛未四月／淮南書局刊成」
 南史 「同治十三年冬十／月金陵書局印行」
 北史 「同治十三年冬十／月金陵書局印行」
 唐書 「同治十二年二月／浙江書局校棗」
 五代史 「同治十一年湖北／崇文書局重雕」

また、史記、漢書、後漢書、三國志、晉書、宋書、南齊書、梁書、陳書、魏書、北齊書、周書、南史、北史の各史各卷末尾題下に「金陵書局仿／汲古閣本刊」、隋書の目録及び各卷尾題後の校記末には「揚州書局仿／汲古閣本刊」の長方木記がある。序目、卷頭題署程式、尾題、版式行格版心等はすべて汲古閣刊本に倣う。ただし五代史だけは、版心上象鼻に書名が刻され汲古閣刊本と異なる。また史記首の錢謙益、張能鱗、侯于唐の序並に毛晉の「重鐫十三經十七史緣起」は省かれ、総目裏葉の直行刊記及び各卷首或は卷末原有の小木記はない。晉書首に貞觀二十年閏二月の「修晉書詔」、末に唐何超の音義三卷が附刻され、隋書各卷末に清薛壽等の考異が附され、この二書は汲古閣刊本とは体例をやや異にする。南齊書末の牒文後に小字双行で「同治癸酉（十二年）以明／南北兩雍本校」とあり、この二十四史所収の十七史は、南齊書以外には明示されていないが、汲古閣刊本を底本としながら、明南北監本等諸本との対校を経たものようである。

東京大学東洋文化研究所蔵 三六六冊（史正一10） 光緒五（一八七九）年一〇月淮南書局集成本。

首の書扉に「二十四史（大字篆文）／ 増遼金元三史国語解 遼史拾遺／光緒五年十月淮南書局集成」と。その裏葉に「廿四史書笥之図」を刷印。「徐則／恂印」（白方）、「扞市／講執／息馬／論道」（白方）の印記あり。

京都大学人文科学研究所蔵 六三〇冊（史117） 光緒五（一八七九）年正月湖北書局集成本

首の扉に「二十四史」と題署、裏葉に「光緒五年正月／湖北書局集成」の木記がある。次に「二十四史総目」（第二行低十二格に「仿毛氏汲古閣本」と）がある。

11 局刻二十四史後修本

前掲の二本は装訂精美印面光潔なる早印の大帙であるが、このような早印本は稀少で現存本のほとんどは漢書・後漢書・三国史の三史を原刻の覆刻本で補配した後刷本である。この覆刻は光緒一三（一八八七）年になされ刊行者は原刻と同じく金陵書局で、阿漢書の扉裏に「光緒丁亥季冬／金陵書局重刊」、三国志には「光緒十三年冬／江南書局重刊」の木記がある。金陵書局は江南書局とも称した。

12 嶺東使署校刊後漢書

伝本少なく管見に入ったのは次の一本のみである。

京都大学人文科学研究所蔵 一六冊（中江文庫）

書名のみを篆文で題署せる扉を有し、首に総目及び「後漢書目録」がある。本文巻頭及び尾題の題署程式、行格版心等は並に汲古閣刊本に同じ。各巻末尾題の大題と小題の間に「韓江書局仿／汲古閣本刊」、扉裏に「同治癸酉（一二年）仲秋／

嶺東使署校刊」の木記を有す。

13-16 点石齋石印本

中国において初めて石印本の出版を行ったとされる上海の点石齋より光緒八（一八八二）年に史記が、同二〇（一八九四）年に前後漢書並に三国志が発刊された。この四史は、いずれも汲古閣刊本に拠ったものであるが行格版式は大きく異なっている。

史記 中四冊 子持框題簽に「史記」と題書、書名のみを題した書扉を有し、（他の三史も同様）次に「司馬遷史記目錄」「史記集解序」（隔卅四格に「裴 駰」）があり序末に直接し「五帝本紀第一（小題下に小字双行注あり、卅三格を隔て）史記一」と小題を上は大題を下に配す。尾題は「史記幾」と大題のみ。四周单边（一四・二×一〇）有界廿二行五〇字、注小字双行。版心、白口単黒魚尾、上象鼻に「史記」中縫に卷数及び小題を刻し下象鼻に丁付あり。扉うらに「光緒八年五冬／上海点石齋仿／汲古閣本縮印」の木記があり、その左框外に「申報館申昌書畫室發兌」とある。点石齋は申報館附設の印刷所である。^{全19}

漢書 中八冊 子持框題簽に「漢書^第幾」と（後漢書・三国志も同様）。扉の次に「班固前漢書目録」（下方に「顔師古注」）及び「漢書叙例」がある。本文首は「高帝紀第一上（小字双

行注を附し下方に）漢書一上」と題し次行低一四格に「正義大夫行 秘書 少監 琅 邪 開 国 子 顔師古撰」と。尾題は大題のみ。四周单边（一六・三×一一・二）

有界廿二行五〇字、注小字双行、行七四字。版心様式は史記に倣うが、下象鼻に「仿汲古閣本／点石齋校印」と（後漢書・三国志も同様）。扉裏に「光緒甲午夏卯月／上海点石齋石印」の木記（後漢書・三国志も同様）を有す。

後漢書 中六冊 題簽は漢書に倣う。書扉に続き「范曄後漢書目錄」（下方に「唐章懷太子賢注」）があり、第六冊統漢志首に梁郊令劉昭の「注補統漢書八志序」及び「司馬彪統漢書八志目錄」がある。本文首は「光武帝紀第一上（隔卅八格）後漢書一上」次行低卅五格に「唐章懷太子賢注」と、統志首は「律曆志上 律準 候氣 統漢志一」次行下方に「梁劉昭 注補」と題す。四周単辺（一六×一・二糧）、行格、版心は漢書に倣う。本版の巻立は汲古閣刊本と同じく志三〇巻を独立させているが大題を統漢志とするところは異なる。

三国志 中四冊 題簽・扉は漢書・後漢書に倣う。首に「上三国志注表」及び「陳寿三国志目錄」（下方に「裴松之注」）がある。本文首は「魏書一（隔四三格）三国志」と題す。四周単辺（一六×一・一糧）、行格、版心は前後漢書に倣う。

おわりに

以上みて来た如く、明崇禎一七（一六四四）年に毛晉により校刊された十七史は、清初より清後期に亘るほぼ二百年の間に累々として印行を重ね内外に通行流布した。清前期に於ては明南北監本を陵駕し、乾隆初年武英殿版が公刊されて以後も、弘通の度合は衰えてはいないように思われる。その間に版木の傷

みが進行し乾隆後期頃の印本になると殆ど初印本の清麗さは失なわれ、席氏掃葉山房がその刻板を購求して後は、嘉慶以後数次に亘って加修補刻が繰返された。加修される一方で原板の損傷は加速的に進み靜嘉堂文庫蔵本（甲6）等の如きは印面潰敗し繙読に耐え得ない程となっている。最終的にいつ頃まで刷印されたものか断定し得る資料を持ち合せないが、恐らくは汲古閣刊本を採用して同治光緒間に五書局から刊行された二十四史発行の直前にまで及んだであろう。

我国への伝来は、船載書目に拠ると正徳二年（清康熙五一年一七一二）四番船を嚆矢とするが、恐らくはそれより以前、寛文延宝頃（清康熙前期頃）には已に船載されていたとみてよいであろう。蓬左文庫蔵本（1691）・尊経閣文庫蔵本等は、清順治一三（一六五六）年補修完了後間もない清康熙初め頃を下らない早印本とみなし得る。正徳二年四番船に引き続き、同三年廿六番船（船載書目、部数不明、一部カ）、同四年第一番南京船による二部が記録されている。^(注12) 以来、寛延三年（清乾隆一五年一七五〇）に五部、^(注12) 宝曆四年（清乾隆一七年一七五二）に二部、^(注12) 同一〇年（清乾隆二五年一七六〇）に一部（^(注12) 以上は弘簡録・続弘簡録元史類編合編本）が、さらに寛政一二年（清嘉慶五年一八〇〇）に一部、^(注15) 文化元年（清嘉慶九年一八〇四）に三部、^(注22) 天保一五年（清道光二四年一八四四）に三部、^(注23) 嘉永二年（清道光二九年一八四九）に四部、^(注24) 同五年（清咸豊二年一八五二）に一部（^(注25) 以上は宋遼金元別史合編本）の計二四部の船載の

記録が残っているが、実数はこれをはるかに越えるものと思われる。江戸中期より幕末にかけて我国での流通の様相を傍証するに足る。

注1 魏冲、字は叔子、或は道用。魏浣初の弟。明馮舒編、懷旧集卷上に小伝並に詩詞十首を載録。また清吳山嘉、復社姓氏伝略卷二に略伝あり。

注2 錢謙益については吉川幸次郎「錢謙益と東林―政客としての錢謙益―」（日本中国学会報第十一集 一九五九年）、「居士としての錢謙益―錢謙益と仏教―」（福井博士頌壽記念

東洋思想論集 一九六〇年）、「錢謙益と清朝『經学』」（京都大学文学部研究紀要第九 一九六五年）の一連の論考がある（いずれも吉川幸次郎全集第十六卷所収）。尚、羅炳綿「清初錢毛諸藏書家与学风考」（新亞學術年刊第六期 一九六四年、清代學術論集 台北 食貨出版社 一九七八年に転載）に錢謙益の目錄字並に毛晉との交遊についての詳論がある。

注3 曝書亭集卷七九嚴籀人墓誌銘に「天啓崇禎間、屢試于鄉不利、兵後遂高蹈不出」と。

注4 周榮起、暴書雜記卷下に周榮起手鈔鉄網珊瑚末の嚴元照手跋を引き「国初江陰周硯農手録本。硯農名榮起、館於毛子晉家。子晉所刻書籍、硯農為之校正。」と、また増訂四庫簡明目錄標注芸術類鉄網珊瑚条下にも同内容の一文が見える。

注5 劉臣、汲古閣書跋（上海 古典文学出版社 一九五八年）附編所収の杜工部集条下に「先君昔年以一編授展曰、此

杜工部集乃王原叔校本也。余借得宋板命蒼頭劉臣影写之。其筆雖不工、然從宋本鈔出者云云」と。

注6 曝書亭集卷七九嚴籀人墓誌銘にも「翁（毛晉）從游錢尚書謙益之門、勤學嗜古博覽典籍、謂經術必本漢唐、庶窮源得以津逮、乃于崇禎元年開梨棘之局、發雕經十三史十七子所居汲古閣下」と。

注7 顧夢麟と毛晉との交誼に関しては、「桑海以後、斷跡城市、客授汲古毛氏、与孝廉陳瑚莘白鹿洞規行之、曉筆暮詩、一写性真、不假粉墨。」（南雷文約卷二 顧麟士先生墓誌銘）、「客常熟汲古閣毛氏、有坐子晉汲古閣賦詩三首」（織簾居詩卷二）と見える。但し、織簾居詩は伝本極めて少なく筆者未見。朱俊、明季南応社考（国立北京大学国文学季報第二卷第三号 一九三〇年）の引用に拠る。

注8 史記素隱三〇卷 唐司馬貞撰 明毛晉校（「明崇禎」刊（常熟毛氏汲古閣）

注9 五代史補五卷附五代史闕文一卷 宋陶岳撰（闕文） 宋王禹偁撰 明毛晉校 明末刊（常熟毛氏汲古閣）

注10 弘簡錄二五四卷首目一卷統弘簡錄元史類編四二卷首目一卷 明邵經邦撰 清邵遠平校（統） 清邵遠平撰 清康熙

刊（繼善堂）
又〔清乾隆〕修（繼善堂）

注11 現存本からみてもこの二十一史の通行は瞭然であるが、享保三年七月大意草書稿（大庭脩 江戸時代における 唐船持渡書の研究 関西大学東西学術研究所 一九六七年）の「二十一史」の条

に「右ハ先年ヨリ渡り来候万曆板全書ノ二十一史ニテ近年渡り来候十七史ニ弘簡録ヲ加テ二十一史ト題シ候書ニテハ無御座候少染汚アリ」とみえ、弘簡録を付印せる十七史が遅くとも享保初年には唐土より舶載され流通していたことが明瞭である。享保三年は清康熙五七(一七一八)年に当る。

注12 この乾隆印正統弘簡録合編十七史は江戸後期以後舶来され流通した。寛延三年午七番船同九番船同拾番船書物覚書

(同上、並「舶載書目」第三九冊)に「二十一史 五部四十套四百本ノ右ハ十七史ニ唐ヨリ元マテノ略史弘簡録ヲ附シ来リ候書ニテ二十一史ノ全書ニテハ御座ナク候」と、宝曆四年舶来書籍大意書成番外船(同上)に「二十一史 式部各四十套四百本 内老部、脱紙三張 右ハ十七史ニ弘簡録ヲ合セ二十一史ト称シ申候フ汲古閣蔵版ノ書ニテ御座候」と、宝曆十年辰

老番唐船持渡商売書物目錄并大意書(同上)に「二十一史

十七史弘簡録合編 汲古閣蔵版 老部四十套四百本 但脱紙四十六張」とみえ、近

藤重蔵(明和八(一七七〇)正齋書籍考卷三に「近來西土ノ書

林十七史ニ弘簡録諸書ヲ附シテ廿一史ニ易ルモノアリ外套或

ハ直チニ廿一史ト書スルアリ」と、寛延三年は清乾隆一五

(一七五〇)年、宝曆四年は乾隆一九(一七五四)年、十年

は乾隆二五(一七六〇)年に当る。

注13 乾隆三十四年六月丙辰の上諭「錢謙益本一有才無行之人。在前明時、身躋臚仕、及本朝定鼎之初、率先投順、涉陟列卿。大節有虧、實不足齒於人類。朕從前序沈德潛所選國朝詩別裁集、曾明斥錢謙益等之非、黜其詩不錄。實為千古立綱

常名教之大閑。彼時未經見其全集、尚以為其詩自在、聽之可也。今閱其所著初學集・有學集、荒誕背謬、其中抵謗本朝之

處不一而足。夫錢謙益果終為明臣守死不変、即以筆墨騰謗、尚在情理之中。而伊既為本朝臣僕、豈得復以從前狂吠之語刊

入集中。其意不過欲借此以掩其失節之差、尤為可鄙可恥。錢謙益業已身死骨朽、姑免追究。但此等書籍悖理犯義、豈可聽

其流傳、必当早為銷燬。著各該督撫等將初學有學二集於所屬書肆及藏書之家、諭令繳出、彙齊送京。至於村塾鄉愚、僻處

山陬荒谷者、並著為出示明切曉諭。定限二年之内、俾令尽行繳出、毋使稍有存留。錢謙益籍隸江南、其書板必尚存。

且別省或有翻刻印售者。俱著該督撫等即將全板儘數查出、一併送京、勿令留遺片簡云云(大清高宗純皇帝實錄卷八三六)

注14 乾隆二十六年十一月庚子の上諭に「沈德潛來京、進所選國朝詩別裁集、求為題辭。披閱卷首、即冠以錢謙益。伊在前明、曾任大僚、復仕國朝、人品尚何足論。即以詩言、任其還

之明末可耳、何得引為開代詩人之首云云(大清高宗純皇帝實錄卷六四八)

注15 我國へは寛政一二年即ち清嘉慶五(一八〇〇)年に逸速く宋遼金元別史合編十七史が一部舶載されている。寛政十二年申一番船齋來書目(江戸時代における唐船持渡書の研究収)に「廿一

史 十七史宋遼金元別史合編 一部四十套」と記録され、以後、文化元年(清嘉慶九年一八〇四)子六番船改濟書籍目録

に三部、天保十五年(清道光二四年一八四四)辰式番割落札

帳に三部、嘉永二年(清道光二九年一八四九)酉三番船書籍

元帳に三部、同五年（清咸豊二年一八五二）子二・三・四・五番船書籍元帳に一部がみえ、江戸後期より幕末にかけてしばしば将来されている。

注16 陶湘は、「康熙間板已四散經史兩部歸蘇州席氏掃葉山房」

（明毛氏汲古閣刻書目錄）と言うがその根拠となる史料は未詳。

注17 旧五代史一五〇卷目錄二卷附攷証 宋薛居正等奉敕撰

〔清永瑤等〕校 〔清〕刊（蘇州趙氏書業堂） 覆清嘉慶元

（一七九六）年掃葉山房刊本

注18 明史三三三卷目錄四卷 清張廷玉等奉敕撰 〔清〕刊修

（蘇州趙氏書業堂）

注19 戈公振 外資經營的中文報刊（中國近代出版史料初編

上海 中華書局 一九五七年）参照。点石齋石印書局は英國

人 F. Major の開設になる。F. Major は初め兄と共に茶販

業に従事していたが、経営振わず廃業の余儀なきにいたり、

陳莘庚の勧めに従い新聞発行の事業にふみきり、同治一一

（一八七二）年三月二三日、申報を発刊するに及んだ。申報

出版によって得た厚利を資金として、点石齋石印書局、圖書

集成鉛印書局、申昌書局、燧昌火柴廠等を添設経営した。点

石齋は初め主に書画譜録類を印行し、吳友如・金蟾香等の画

家の執筆になる点石齋画報は最初期の画報出版として有名で

ある。後には康熙字典、南巡盛典、万寿盛典等書籍の出版を

も行うようになる。

注20 商舶載來書目 正徳二千辰年に「十七史 一部三百二十本」と。

注21 正徳四年第一番南京船齋來書目 「十七史 一部二十四

套二百十本、十七史 一部三十二套二百十三本」

注22 文化元年子六番船改濟書籍目錄 「二十一史四十七史宋鑒四四百冊四百冊元別史合編

三部各三十套」

注23 天保十五年辰式番割落札帳 「廿二史十七史四朝別史付

三部／巻貫八百三十匁 松のや／巻貫五百五十匁 三枝／巻

貫三百九十匁 長ラカ」

注24 嘉永二年西三番船書籍元帳 「一 汲古閣廿二史旧五代史四朝別史

〇三部各三十六套」

嘉永二年西六番船書籍元帳 「一 汲古閣廿二史〇一部四十

二包」

注25 嘉永五年子二・三・四・五番船書籍元帳 「一 廿一史

四朝別史附〇一部四十套」

末筆ながら、本稿はトヨタ財団研究助成金による「国書並びに漢籍総目録の編纂」のための調査結果の一端として発表するものであることを銘記し、謝意を表す。また本調査に際して、多大なる御高配を賜った蓬左文庫をはじめ公私の諸図書館文庫の方々に深謝する次第である。